

ヒアリング調査結果

【学校教育支援と震災復興支援で事業のネットワークを最大活用】

属性	「世界青年の船」事業参加者	女性・30歳代 宮城県在住
経歴	大学時代に国際交流活動への参加、社会人になってからもオーストラリアへのワーキングホリデーを経験。ワーキングホリデーからの帰国の翌年第13回（平成12年度）に参加。	
現況	参加後しばらく続けていた児童英会話教室の講師を辞め、日本語教師の資格取得、発展途上国でのボランティア活動にも従事。現在は学校教育支援のためのNPO法人で代表理事を務め、学校の先生をサポートするための地域の応援団と仕組みの構築に取り組んでいる。平成20年には、キャリア教育の文部科学省大臣表彰を受けた。	

<事業参加による意識変化、行動、社会への働きかけ>

- 1 事業では、衝突を避けるのではなく正面からぶつかりあうことから相互理解が得られることを実感した。
- 1 事業参加後は、以前から続けていた児童英会話教室の講師としてしばらく働いていたが、自分の目指す教育は違うところにあると感じ、退職。その後、専門学校に通い日本語教師の資格を取得、また、発展途上国でのボランティアも経験する。
- 1 その後、キャリア教育に出会い、教育の本質があると思った。常にグローバルな感覚を持ちながら、地域に如何に還元していくかということを考えた際の切り口が、自分にとってはキャリア教育であると確信した。
- 1 現在は、NPO法人代表の立場で、学校教育では先生方のニーズに応じたワークショップ型プログラムの実施や講師コーディネートなどの支援や、社会教育でも行政や企業等と連携したキャリア教育を行う。また、県の社会教育委員や学校評議員の要職も務め、広く教育や青少年育成について発信している。
- 1 東日本大震災の復興支援活動では、事業で得たネットワークを通じて被災者の方や医療スタッフへの支援を迅速かつ的確に行うことができた。

1. 事業参加について

【1】内閣府青年国際交流事業に参加したきっかけ・理由

<きっかけは国際青年育成交流事業への応募>

- ① 参加当時は26歳、児童英会話教室の講師として働いて1年が経ったところであった。辞めて参加することも考えていたが、参加期間中の代替え講師がタイミング良く見付き、在職の状態に参加することが出来た。
- ② 23歳の時にオーストラリアでワーキングホリデーを経験した際に日系ブラジル人に出会い日系社会に関心を持ち、帰国後にブラジルへの航空機派遣（国際青年育成交流事業）参加者募集のポスターをJRの駅で見つけて申し込んだが、選考に漏れ、参加出来なかった。
- ③ しかし航空機派遣への申し込みがきっかけで他の内閣府事業についても知り、世界船の方が一度に世界中、日本中の青年との交流を通して視野が広がるのではないかと、豪華客船で研修出来る機会は一生ないだろうと考え方を変え、翌年は世界船に応募した。

【2】参加したプログラムのうち、最も印象に残っていること、影響を受けたこと

- ① 最も印象に残っている出来事は、3つ。一つは、仲間（AGLの相方）との衝突と相互理解。二つ目は、一人ひとりの存在意義の実感。三つ目は、仲間との世界船への意義のアンケート調査。

< 仲間との衝突 >

- ① 参加者の3-4割は社会人であったと思う。
- ② 参加したのは第13回(平成12年度)。メンバーにも非常に恵まれた。前年航空機派遣には選に漏れたが、それは彼らに出会うため、第13回に参加する運命だったのだと感じている。
- ③ それまでの国際交流活動への参加(大学時代)、オーストラリアでのワーキングホリデー経験を通じ、事業に2カ月参加した後の自分というものがなんとなく想像出来ていた。メンバー間の衝突や共同体験を経て自分の感情など、ある程度想像した上で、自分らしい事業にしたいという思いで参加した。
- ④ グループ活動の最後に自分の感情を全員にぶつけたことである。きっかけは、同じグループのもう一人のAGL(自身は女性AGLだった)の行動に対して、グループ全体でのルールが守れなかったことである。事前研修でも、船内研修でも、グループ内での人間関係トラブルはつきもの。自分はAGLという責任を全うしようと神経を注いでいたが、彼は前夜、自分の活動のための作業をしていたため、自グループが船上で最後のモーニングアッセンブリーの担当であったにも関わらず、翌朝寝坊という事態が発生。毎朝の点呼、さらにM・Aの準備という段階で和を乱す行動(彼の自主活動も大変素晴らしく、理解はしていたが)に、思わずグループ29名全員の中で、泣きながら感情をぶつけ、AGLという立場をどのように考えているかを聞き、「グループのために何か行動を示して欲しい」と伝えたことである。この時、メンバー全員が私の考えに理解を示してくれた事、彼のフォローにも回ってくれた事、それぞれの立場で考えを表してくれた事があった。後に彼は、写真入りのメッセージを全員に渡してくれた。この事は、グループとしての在り方や互いの関係性を深めたと感じている。
- ⑤ この体験を通じて、トラブルが起きた時に抱え込んで黙ってしまうのではなく、正面からぶつかりあえたからこそ得られる相互理解というものがあるのだということを実感した。事業が終わってからもいい関係を継続していられているのは、その場で本音を伝えあって解決してきたからこそだと思っている。

< 存在意義の実感 >

- ① 二つ目は、下船の日、朝まで心を許し合える仲間とディスカッションをしたりして、朝陽を見ながら船上での2カ月を振り返ったことである。その時、一人一人の存在意義・価値を、事業に関わっている全員に対して心の底から感じたのを強く覚えている。一人一人がここにいる意味の大きさ、だからこそ相手を尊重し、受け入れることの大切さを実感し、世界船に参加して本当によかったと思った。

< 世界船意義のアンケート調査 >

- ① 非常に充実し、学ぶ事が多かった世界船事業であったと同時に、参加者の意識のばらつきについて悩みも発生。自分自身だけでなく、同じ事業に参加したメンバーがどのように感じていたかすごく悩み、13回参加青年2名の仲間と共に、事業について、日本参加青年の意識についての独自のアンケート調査を2度(下船直前と半年後)実施した。それは自分自身が船事業の意味について疑問を感じ、皆にそれを聞きたいという気持ちから起こした行動だったが、結果を13回メンバーに還元すると同時に、14回の人々の参考にして欲しいという思いがあった。

2. 事業参加後の国際ネットワーク形成や社会貢献活動について

【1】事業参加をきっかけとして、継続している国際的な交流について

< 仲間との出会いが人生最大の宝 >

- ⑦ 今でも世界船同期である同じグループ日本人メンバーや、同県出身メンバーとは連絡を取り、定期的に会っている。
- ⑧ かけがえのない仲間と出会えたのは船に参加したからこそであった。人生の最大の宝であり、財産であると思っている。

【2】 事後活動組織において実施している活動について

- ① 宮城 IYEO で全国大会や地方プログラムの受け入れ等において中心となり活動。積極的な事後活動を通じて、19 回の世界船に事後活動スタッフとして参加したり、他事業（「日本・中国青年親善交流」事業副団長）にも声がけをいただき参加した。
- ② IYEO のネットワークを駆使し、被災地の復興支援を行っている。（詳細は後述）
- ③ また、IYEO を通じて被災地の小・中・高校での講演会を開催している。（詳細は後述）

【3】 実施している社会貢献活動について

- ① 学校支援活動。（詳細は後述）
- ② 被災地の復興支援。（詳細は後述）

【4】 語学力や国際的に通用する資格取得等、自己啓発で行っていること

- ① 参加後4年たって勤務していた英会話教室を辞め、東京の専門学校に半年間通って日本語教師の資格を取った。
- ② 資格の勉強が終わってからは発展途上国（ラオス、インド）でボランティア活動を行った。
- ③ 世界船参加を通して、相互理解のために対話や何かを生み出す「場づくり」を行うファシリテーションやワークショップの重要性に気づき、様々な学びの機会に参加し、スキルアップを図っている。

【5】 事業で得た人脈やネットワークが仕事や社会貢献活動に役立っている例

< 復興支援で発揮された IYEO のネットワーク >

- ① 現在は、東日本大震災の復興支援活動で IYEO と NPO の活動とが繋がっている。内閣府事業への参加、IYEO での活動、まなびのたねネットワークでの活動という自分のこれまでやってきたものが、復興支援を通じて全て繋がった。それぞれのネットワークを駆使し、足りないものはお互いを使って補いつつ、活動を進めている。
- ② 復興支援の時ほど IYEO ネットワークの有難さを感じたことはない。震災後最初の1年は、IYEO 会員で石巻市立病院で看護師をやっている先輩がおり、彼女を窓口として、IYEO を通じてニーズに応じながらありとあらゆる必要な物資を被災地に届けた。当時医療スタッフ自身とその家族たちに対する生活支援がほとんどなかった。車も家も家族も津波で流され、病院自体も機能していない中、被災者でありながら最前線で支援者として頑張っている医療スタッフたちの食べ物、保存食品、生活用品、衣服、ブランケット、自転車、クールネックなど、季節に応じ必要な物を何でも IYEO の支援で届けた。
- ③ 緊急物資は、SWY13 のメーリングリストに1通出しただけで全国から自宅に大量の段ボールが届き、支援が行き届かなかった松島湾の離島や石巻市立病院の医療スタッフへ県内外 IYEO メンバーや友人の協力を得て届けた。夏に「温泉に行きたい」という声が避難所生活や支援活動に疲弊した医療スタッフから挙がると、IYEO からは快く支援金をいただき、山形県 IYEO の仲間には電話で一言伝えただけで、医療スタッフが家族と共に温泉で休養できるプランをコーディネートしていただき

3度実施した。IYEOの支援は、被災地のニーズを的確に把握した素晴らしいものであった。これは普段からIYEOの仲間達が内閣府事業の受入等を通して得たネットワークとフットワークの軽さ、そしておもてなしの心があるからこそだと思っている。このような素晴らしい支援が1つの団体で出来るというのは本当に凄いこと。IYEOでなければ出来ないことだと思う。

- z また、IYEOの東日本大震災復興支援活動として、平成24年度より東ア船OBの方が講演会を被災3県で行っている。自身の教育分野のネットワークを活かし、特に津波被害に遭った沿岸部学校を中心に、小・中・高校生に対して「夢を持つ大切さ、自分の持ち味を生かすこと」などを伝える講演会実施に向けた授業コーディネートをやっている。事業で得たネットワークを学校に還元できるというのは、この仕事をしているからこそだと思う。

3. 参加後の自身の能力向上やキャリア形成について

[1] 調整・交渉を進める実践的な能力向上において事業参加経験が役立っていること

<先生方の想いを伺った上でのプログラム提案>

- z NPO法人の活動については、ホームページやブログなどでの情報発信が弱く、積極的な営業活動も苦手である。しかし、出会った先生方と信頼関係を築くことを重視し、ニーズに応じたプログラム提案や授業を実施し、実践を積み重ねてきた。あくまでも相手のことを考えて、授業であれば子ども達の姿を見据えて(授業を通しての学びや変容)、共に何ができるか、より良い活動にするにはどうしたら良いか、という考え方が事業参加前から自分のベースにある。そのお陰か、教育現場や他の分野から人材育成に関するニーズは増えてきており、有り難いことである。
- z IYEOでの事後活動経験が、現在のNPO活動に役立っている。受入や全国大会等で中心的に事務局メンバーとして関わることで、リーダーシップやマネジメントについて実践的に学び、経験を積んできた。NPO活動に携わり、リーダーとしてもマネージャーとしても未熟であるが、2012年には青年社会活動コアリーダー育成事業に参加し、青少年育成について、ドイツや全国の参加メンバーから学ぶことができた。原点は世界船で外国青年の意識の高さや実践スキル、また推進センターで進める事前研修、事後研修の在り方が参考になっている。

[2] キャリア形成や人生に関して影響を受けたこと

<子ども達に伝えたいことは何か>

- z 帰りはシンガポールから航空機で成田へ飛び、成田で事後研修を1泊で受けた後に解散したが、この濃厚な2カ月を自分の中で消化し、リラックスするためには違う場所に行く必要があると考え、そのままオーストラリアに行って2週間滞在することで、現実世界に戻るためのインターバルの期間を設けた。この2週間があったことで気持ちの切り替えがうまく出来たのではないかと考えている。
- z その後4年間は英会話講師の仕事が続けた。もともと語学を身につけることで視野が広がるという体験を子どもにも伝えたいと思い講師をやっていたが、世界船を経験した後は更に、この体験を子どもたちに還元できたらと言う思いも加わった。
- z しかし結局4年間続ける中、週1の英語の授業では自分の目指す教育は出来ないという思いが強くなり、また、企業の利益中心の考え方にも疑問を頂くようになったため、英会話教室を辞めた。自分は子どもたちの心を豊かにする活動をしたく、20代後半はそのための手段を模索する状態が続いていた。

- ⑦ その後日本語教師の資格取得のため学んだものの、「子ども達の心を豊かにするために自分がやるべきことは語学を通してではない。」という想いが強くなった。

<「キャリア教育」との出会い>

- ⑦ 海外でボランティアをしていた際に「Think globally, act locally」という言葉を知り、非常に共感し、海外に出て自分を活かしたいという想いをもちつつも、きちんと自分の足元を見る必要があるということに気付いた。そのような中で子どもの教育、子ども達の心を豊かに出来るものについて考えている時に「キャリア教育」に出会い、ここに教育の本質があると思った。常にグローバルな感覚を持ちながら、地域に如何に還元していくかということ考えた際の切り口が、自分にとってはキャリア教育であると考えた。
- ⑦ NPOの活動自体はもともと、ある企業が経産省から受託した事業として存在していた。有識者が集められ、海外から取り入れたキャリア教育のプログラムを仙台の学校でやってみるといのもであったが、そのプログラムを小学校で見て強い衝撃を受け、これだと思った。こういう教育を受けたら、子ども達が主体的な将来選択を出来るようになると思った。
- ⑦ キャリア教育は、自分自身でも知れば知るほど奥が深い。自分は(世界船も含めた)社会教育を通じてキャリア教育を受けることが出来たことにより、自分自身を客観的に見る機会を貰い、自分の使命と役割を他の人より早く知ることが出来たと思っている。
- ⑦ 参加から時間が経つにつれ、様々な活動に関われば関わる程、事業の意味、IYEO ネットワークの深さと強みを理解し、実感するようになった。今ではこの事業への参加は自分にとって絶対必要だったと確信している。

[3] 現在の会社や所属機関等から期待されている役割

<様々な角度からの学校支援>

- ⑦ NPO法人の代表という立場を存分に使い、学校教育支援を中心に活動している。日本には様々な課題があるが、それらの根本的な解決方法の一つは義務教育段階での学校教育にあると思っている。
- ⑦ 特に小学校におけるキャリア教育は、「最後の砦」という意識で行っている。なぜなら、子ども達の現状を考えると、家庭や地域の教育力の低下が問題の一つとして取り上げられる。数十年かかって今起きている現在の問題に目を向けた時、子ども達が地域社会と接点を持てる最後の機会が小学校になっていると感じている。なぜなら、中学生で不登校や引きこもりになれば、社会とのつながりを持つ事は厳しくなる。また、親の経済格差が教育格差にもつながるが、社会教育は保護者の意識や収入に大きく左右する。そういった子ども達も社会の一員として幸せに生きていけるようになるには、対処療法的支援も重要だが、根本的解決を考えるならば、予防的支援や教育が必要だと感じている。そのための手段が、誰もが受けられる場が学校教育でのキャリア教育であると考えている。
- ⑦ そのためには、授業を実施する先生方をサポートする地域の応援団と仕組みづくり、意識改革が必要であると思っている。NPO法人代表という立場で、先生方の思いに寄り添いながら、ファシリテーターとしてワークショップ型プログラムを実践したり、先生方への研修の機会をいただいたり、コーディネーターとして、学校と社会、子どもと大人をつなぐ活動などを行っている。
- ⑦ また、キャリア教育に対する意識を高めるための学生向け・先生向けの研修など、相手のニーズに合わせて研修プログラムを実施しているが、相手のニーズをキャッチし、一緒に研修を作るという姿

勢を大切に、こちらからの一方的なプログラムの提供ではなく、皆が主体的に参加する、主体性を育むというのを常に考えて研修を組み立てている。

- ⑦ このような活動を通じて、現在は宮城県で社会教育委員(今年度より)、「学ぶ土台づくり」推進連絡会議(2年目)、宮城県青少年問題協議会委員、また、市の学校評議員、学校関係者評価委員等も担うようになり、意見を言わせて貰える場が増えてきている。
- ⑧ また、平成20年12月にはNPO 法人として、キャリア教育文部科学大臣賞表彰を頂いた。嬉しい気持ちよりも、これに恥じないように今後もきちんとやっていかなければという思いが強い。この頃から、それまでプログラム提供、実施だけだったのが、学校支援のコーディネーターとして関われるようになったことで、逆にコーディネーター育成の重要性を知り、活動の幅が広がった。教育現場がどうしていいかわからないものに対して先駆けとして関わっているからこそ、それを研修という形で提供出来るようになった。

4. 参加者ご自身について

【1】業種

- ⑦ 教育関連の特定非営利活動法人

【2】職種

- ⑦ 代表理事

【3】仕事内容

- ⑦ NPO 自体は平成19年の2月に活動を開始し、自身は平成20年1月から代表を務めている。同年8月に法人化した。
- ⑧ ワークショップ型の授業や各種講座、研修会の依頼を受け、ニーズに応じカスタマイズしたプログラムを開発しながら実施している。

5. その他

【1】今後の内閣府事業について

- ⑦ 世界船で得た一人一人の存在意義、価値への気づきは短期間の航海では得られない。ただ相手と衝突して終わり、というのではなく、そこから相互理解へ辿りつけたのは、2ヶ月という期間があったからこそだと、現在他の事業にも関わっていて非常に強く感じている。1ヶ月半~2ヶ月という時間が確保されているからこそ、人間関係のアップダウンがあり得るのではないかと思う。

以上

【世界船での体験から新たなキャリアを築く】

属性	「世界青年の船」事業参加者	女性・30歳代 東京都在住
経歴	小学校・中学校・高校時代にアメリカでのホームステイ・国際交流プログラム・留学を経験。大学在学中は、シンガポール、インドネシア、中国、アメリカ、香港、マカオへの渡航を経験。大学4年生の1月から第10回（平成9年度）に参加。	
現況	世界船でアラブの人々や文化に魅了され、アラブ圏の研究を開始。チュニジア・エジプトへの留学、調査のためのエジプト長期滞在の後に博士号を取得、国立大学の北アフリカに関する研究センターへ着任した。	

<事業参加による意識変化、行動、社会への働きかけ>

- 1 事業に参加し、アラブ人の仲間を思いやる気持ちや懐の深さに魅了された。彼らの中に日本人との共通点のようなものを見出し、この温かさはどこから来るのか、彼らの文化を学びたいと考えようになった。
- 1 参加前、既にアメリカでのホームステイ・留学・国際交流プログラム、中国への短期語学留学、インドネシアでの国際交流活動などを経験しており、進学が決まっていた大学院ではアメリカ研究をやるつもりであったが、世界船でアラブの人々に出会ったことで中東研究へのコース変更を決意。在学中にチュニジア・エジプトへ政府奨学生として留学、博士論文の調査のためのエジプト長期滞在も経験した後、博士号を取得。現在は国立大学の中東・北アフリカ・地中海圏に関する研究センターに研究者／教育者として勤務している。
- 1 自身の国際交流経験から得た学びを振り返り、学生たちにも現地に行って現地の文化に触れてほしいという思いから、大学主催の語学研修プログラムを担当している。また、全学でのアラビア語の授業を開講。大学の国際化に寄与している。
- 1 更にNHK文化センターや自治体でイスラーム文化に関する講座の講師、被災地での出前授業など、中東・北アフリカの宗教・文化研究の分野で活躍中である。

1. 事業参加について

[1] 内閣府青年国際交流事業に参加したきっかけ・理由

<長い間漠然と憧れていた世界船>

- ① 中学、高校時代に聞いていた、NHKラジオ講座のテキストの後ろに事業の募集要項が掲載されており、色々な国を訪問できて、色々な人と知り合えるなんてとても面白そうなプログラムだ、参加できる年齢になったら是非参加したいと考えていた。
- ② 大学4年生の春に事業参加が決まり、1～3月に乗船した。

[2] 参加したプログラムのうち、最も印象に残っていること、影響を受けたこと

<アラブ文化・アラブの人々の本当の姿>

- ① 世界船に乗り、アラブの人々の「同胞を大事にする」温かさに魅了された。個人主義的考えを持つ欧米人とは異なり、同胞という集団に重きを置くアラブ人は、彼ら同士や更に彼らと友達になった私たちのことまで気にかけて、大切にしてくれるその姿勢に、日本人と共通するものを見出した。
- ② 船上でのアクティビティとして、太鼓のパフォーマンスや指導を行ったが、個人的にはそれらの時間とともに自由時間における参加青年との交流が大変強く印象に残っている。船の経験は、個々の事前活動や船内活動、事後活動というよりも、全体として自分の中に残っている感じがする。
- ③ ケニアでの寄港地活動においては、現地出身の外国青年が「ここは危ないから、手を絶対に離さないで」と言って、ずっと一緒にまわってくれたことで、現地の状況をリアルに感じる事が出来たの

を覚えている。2泊3日の短期間の活動だったが、彼らに色々なことを教えてもらいながら一緒に新しい体験が出来たことも印象的だった。

- ⑦ 乗船後、しばらくは日本人も含め多様なバックグラウンドを持った参加者たちの中で自分の位置を決めるのが難しかった。しかし、別れの時には外国青年たちが船を次々に降りていなくなっていく度に皆寂しがり、一生でこんなに泣くことがあるのだろうかと思うほど泣いた。それほど充実した時間を過ごせていたんだなと、今になっても思い出す。

2. 事業参加後の国際ネットワーク形成や社会貢献活動について

[1] 事業参加をきっかけとして、継続している国際的な交流について

< 日本人青年、外国青年との交流を継続 >

- ⑦ 参加後、1998年夏にチュニジアへ短期留学した際には、世界青年の船のOGがいることを調べ、会いに行った。1999年にエジプトへ留学した際(詳細は後述)には、一緒に乗船した外国青年が空港まで迎えに来てくれた。留学中はカイロで現地の参加青年に会うことも出来たし、ミレニアムにはそこからバーレーンとUAEの外国青年のところへも遊びに行った。
- ⑦ 日本人の参加青年とも、メールのやり取りをしたり、みんなで集まったりなど、交流が継続している。
- ⑦ 国の研究機関の専門家になった日本人青年が当センターのプロジェクトの評価員として来たことで、思いがけない再会を遂げたこともある。

[2] 事後活動組織において実施している活動について

- ⑦ IYEOでの活動は特にないが、大学で内閣府事業についての説明会が開催された際には、既参加青年としてプレゼンテーションを行っている。

[3] 実施している社会貢献活動について

< イスラームに関する講座の開講 >

- ⑦ NHK文化センターで講師としてイスラーム社会や文化についての講座を受け持った。
- ⑦ また、大学の取組として、被災地の高校へ出前授業をしに行くこともある。そのような時学生たちに自己紹介する際には、必ず世界船の話をする。

[4] 参加をきっかけとして、異文化理解や自国文化の理解のために日頃取り組んでいること

< 大学の語学研修プログラムを担当 >

- ⑦ 大学でアラビア語と現地文化を学ぶ研修プログラム(フルサ・サイードプログラム)を担当し、学生を送り出している。かつては小さなプログラムであったが、在日チュニジア大使館の推薦による授業料免除と寮費補助、JASSO奨学金プログラム採択など、徐々に評価してもらえるようになってきたところである。
- ⑦ また、カナダ プリンズエドワード島大学への夏期英語研修プログラムを立ち上げた。
- ⑦ 例えば、自分が学生たちに対し、ほんの少しイスラーム文化について話したり、アラブ人留学生をTAとして招いて交流する機会を与えるだけでも、学生たちには変化が見える。現地に行けばもっともっと大きな変化が起こるに違いないと思う。
- ⑦ 更に、このような草の根的な活動が、やがては戦争の回避など、平和につながってくると信じている。

[5] 語学力や国際的に通用する資格取得等、自己啓発で行っていること

< 参加後もアラブへ留学、滞在 >

- ① 1998年にはチュニジア政府奨学生としてチュニスのアラビア語学校に留学。また、1999年にエジプト政府奨学生としてカイロに留学し、アラビア語を学んだ。
- ② 2004年には、友人の指導教官だった考古学の教授のもとで発掘調査の手伝いの傍ら、エジプトの地方農村でのインタビュー調査を行い、2005年からは博士論文の調査のためにエジプトの小都市ミニヤに1年半滞在し、エジプト総人口の約10%を占める宗教的マイノリティであるコプト・キリスト教徒や19世紀にイランで発祥したバハーイー教徒と多数派であるムスリムとの関係や、現地に残る民俗信仰に関する調査をおこなった。
- ③ エジプトからの帰国後、2007年は博士論文のまとめに専念し、2008年7月末に学位をとって卒業、2008年より当研究センターに着任した。

[6] 事業で得た人脈やネットワークが仕事や社会貢献活動に役立っている例

< 恩師との出会い >

- ① 事業で得た人脈というわけではないが、自分がエジプト留学中に自分の所属していた大学に着任した中東研究の第一人者が、現在に至るまで恩師として自分を支えてくれている。恩師に出会ったことで、地域研究の修士課程修了後、宗教学の一貫制博士課程でしっかりとした指導を受けることができ、入り、後には当研究センターのポストに就く際にも尽力していただいた。内閣府事業に対する理解も深く、事業が危機に瀕した際には、存続のための意見書(推選状)も出してくれた。

3. 参加後の自身の能力向上やキャリア形成について

[1] 調整・交渉を進める実践的な能力向上において事業参加経験が役立っていること

< グループワークの重要性 >

- ① 大学での授業においては、学生 教員、学生 学生のインタラクションを特に大切にしている。一方的に教えるだけでなく、お互いに話し合いながらやる方が楽しみながらのびのび出来るうえ、コミュニケーション力やプレゼンテーション力もアップすると思っている。それまでに受けた教育や国際交流の経験、また、船上活動で様々なグループワークを経験し、このような考え方を持つようになった。
- ② 現在大学で担当している語学研修プログラムにおいても、学生同士が集まって自主的に取り組む活動を重視している。

[2] キャリア形成や人生に関して影響を受けたこと

< 「世界船でアラブの人々に出会わなければ、今の自分はなかった」 >

- ① 参加するまでは、アラブ人やイスラームについて「テロ」「なんだかよく分からない人々」というイメージしか持っておらず、ほとんどその実態を知らなかった。しかし世界船でアラブ人の懐の深さに触れ、この温かさは一体どこから来るものなのか、彼らの文化をもっと知りたいと考えるようになった。
- ② 参加前、既に4度のアメリカ訪問、中国(短期語学研修)、シンガポール、インドネシア(大学の国際交流サークルの活動の一環)、香港、マカオ(返還直前に実態を知るため)への渡航経験があり、大学卒業後は大学院のアメリカ研究コースへ進学が決定していたため、自分はアメリカについての

研究をやっていくのだと漠然と考えていたが、世界船に乗ったことがきっかけでアラブに魅了され、翌年には中東研究のコースへ進路を変更した。そのまま博士課程へと進み、今に至っている。まさに、世界船でアラブに出会わなければ、今の自分はなかったと言える。

【3】現在の会社や所属機関等から期待されている役割

< 自身の経験を学生たちに >

- ① 世界船や、その他の国際交流経験を通じて、自分自身が現地に行ったからこそ見えるものや言えることがあるということを痛感した。自分のアラブに対する無知、偏見が覆されたのも、船という限られた空間のなかで、アラブの人々と長期間寝食をともにし、彼らの国にも行ったからこそだと思っている。だからこそ本学の学生たちにも現地に行って欲しい、そういう機会を与えたい、という思いで語学研修プログラムを担当している。彼らが学びを得ることは現在の喫緊の課題である大学の国際化に貢献しうるのと同時に、自分自身の学びにもなるとも思っている。
- ② 世界船だけでなく、これまで経験した様々な国際交流全てから得た理想型の経験・イメージのようなものが自分のなかにたくさんある。それらが現在のキャリアの色々な場面において自分の引き出しとして役立つくれる。

4. 参加者ご自身について

【1】業種

- ① 研究・教育

【2】職種

- ① 大学教員

【3】仕事内容

- ① 国立大学の北アフリカに関する研究センターに勤務。
- ② 私立大学の総合政策学部を卒業後、現在勤務している大学院地域研究研究科(現・人文社会科学研究科国際地域研究専攻)の修士課程、人文社会科学研究科(宗教学分野)博士課程を経て、2008年より当研究センターに関わっている。
- ③ 教育に携わって3年が経ち、全学でアラビア語の授業を開講するなど、やりがいや面白さを感じると共に結果も徐々に出てきたところである。全学の国際化の流れが更にいい方向に進んでいこう、貢献したいと思っている。

【4】参加前の国際交流経験

- ① 小学校5年生、中学校2年生の時、U'TREK(ユートレック国際交流センター)主催のホームステイに参加。また、高校2年生の夏期にAIU保険会社が主催する国際交流プログラム生(High School Diplomats)に選ばれ、アメリカ東海岸に1か月滞在。高校3年生半ばには、日本の学校に籍を置いたまま、EIL(公益社団法人日本国際生活体験協会)の留学プログラムを1年間経験した。いずれも訪問先はアメリカであった。
- ② 大学時代には、シンガポール、インドネシア(大学の国際交流サークルの活動の一環)、中国(短期語学研修)、香港、マカオ(返還直前に実態を知るため)への渡航も経験した。

- ⑦ 大学3年生の時には、総務庁の国際青年の村にも参加した。

5. その他

〔1〕 今後の内閣府事業について

< 国際交流は継続性を担保することが重要 >

- ⑦ 参加前に経験した1ヶ月程度のホームステイは、慣れたところに終わってしまうという感じだった。そこから大小のコンフリクトを経験し、更にまた絆を深めるまでにはやはり2ヶ月という期間は欲しいと思う。
- ⑦ また、2ヶ月かけて船で世界をまわったからこそ、地球は丸くて、世界は繋がっているんだということが実感できたと思っている。飛行機では味わえない感覚である。
- ⑦ 様々な事情により事業自体が年々変化しているが、内容が変わってしまうと継続性が調べきれないうえ、事業自体がブレているという印象も加わってしまう。国際交流はサステナビリティが重要で、とにかく継続して行って、相手の顔を見に行き、相手のことを忘れていないよということを伝えること、刻々と変化する現地の状況を常に把握していることが大切だと思っている。より高い効果を出すためには、事業内容の見直しや刷新はもちろん必要だが、継続性を担保している方がより有益な結果に繋がるのではないだろうか。
- ⑦ 内閣府事業は人材育成を狙ったものだ理解しているが、育成効果は短期では得られない。自分自身が社会に出て、事業の成果を還元できるようになったのは、事業参加後15年近く経ってからであることは、その証左といえるだろう。長期的な視点をもって、事業の効果を見て欲しい。
- ⑦ 大型客船に乗って大海原を切り開いていくというイメージが世界船にはあり、世界へ行くことこそが世界船の意義であるように思う。国内を外国人青年と共に航海する国際交流は別プログラムとしてあるべきではないかと思う。
- ⑦ 事業についてもっと広く一般の人たちにも理解してもらえるように、報告書とは別に本を出版するのも良いかもしれない。

以上

【日本の教育に問題意識を持ち、NPO法人を設立】

属性	「世界青年の船」事業参加者	男性・40歳代 愛知県在住
経歴	大学で所属していたESSの先輩が既参加青年であったことから第8回(平成7年度)に参加を決意。それまで国内での受け入れ等で国際交流経験はあったが、自ら海外へ赴くのは内閣府事業が初めての体験となった。	
現況	船の中で日本の教育に対して問題意識を持つようになり、大学院を休学し、地域の教育改革のあり方を調査。大学院修了後に、教育関係団体で職を得ながら、協働でNPOを設立へ。地域連携・市民参加型の教育づくりを全国各地へと展開している。	

<事業参加による意識変化、行動、社会への働きかけ>

- | 「世界青年の船」事業では、多様な価値観を持つ人たちとの衝突や議論を経験しながらも、様々な体験を共有することで、他では得られない参加青年たちとの深い絆を育んだ。また、企業からの協賛を集めるためのイベントを成功させるなど、リーダーシップも十分発揮し、自分に自信を持って下船することが出来た。
- | しかし同時に、船の中で、同世代の日本人の若者たちが、自分のことを全く話せないことに問題意識を持ち、教育に問題があるのではという気持ちを抱いたため、参加後は大学院を休学し、教育を変えていく解決策を、地域を回り調査。修了後、教育関連団体で職を得ながら、協働で新しいNPOを設立へ。その後、NPOをキャリア教育の推進団体として事業を確立、自立化させた。
- | 現在は、新たに一般社団法人の代表理事として、市民の自主・自立的な教育投資を促進し、「若者が挑戦できる環境」を築くこと、自分で動いて、体験し、乗り越えていくことを体感できるような場(インターンシップ等)を地域の中に作ることを目的として活動している。

1. 事業参加について

【1】内閣府青年国際交流事業に参加したきっかけ・理由

<大学のESSの先輩達の参加体験を聞いていたこと>

- z 大学のESSの先輩が、真っ黒に日焼けした晴れやかな笑顔で帰国し、「青年の船に行ってきたよ。良かったよ。」と、2~3時間も話しが止まらなかった。その先輩に誘われて事後活動に参加し、IYEOの中心となっている方から話しを聞いたりしていた。その後もESSからは毎年1人ずつ、3年連続で参加していて、話しを聞いていた。
- z それまでに海外に行ったことはなく、青年の船が初めての海外だった。それまでも国際的な活動には参加していた。それらは日本で、海外の人を迎え入れる立場だった。

【2】参加したプログラムのうち、最も印象に残っていること、影響を受けたこと

<独自の文化が構築されてゆく、船での生活>

- z 他の国際交流とは違い、ホスト国とビジター国の立場が明確でない。形としては日本がホスト国だが、閉鎖された船の上では、独自の文化が構築されてゆく。
- z 南アフリカでの寄港地活動中に、ベルギーの青年が時間にかなり遅れた。罰として皆の前で謝罪をさせることになった。彼は、I'm sorryとは言ったが、「もしも、生涯たった1度の女性との出会いがあっても、目の前で人が倒れていても、全てふり捨ててでも時間を守ろう!!」というようなスピーチをして大笑いの拍手喝采を受けた。これに対して日本人は、「こんな態度は不誠実だ」と怒り、ディスカッションになった。このような出来事からも独特な文化観が構築されていくことがとても興味深かった。

- ⑦ 船は、特に別れの場面でドラマティックである。鐘がなり、別れを惜しんで船が岸から少しずつ離れ、見えなくなっていく中、ずっと手を振りあった光景は今でもありありと思い出せる。このような、感動的な場面をいくつも共有しているからこそ、深い絆がある。
- ⑧ 船の事業はお金がかかり、大変なことは分かるが、船でなければできない味がある。むしろもっと積極的に、戦略的に、船を使っていけば良いのではないか。日本は海洋国家であり、日本のアイデンティティとして、船を使うことには意味がある。
- ⑨ 船ならではの文化が出来上がるまでに、少なくとも3週間くらいはかかる。2週間までは、不満や苛立ちがあっても我慢して生活することができる。それを過ぎると、少しずつ本音が出てきて、衝突が生まれたり、意見交換をするに至る。
- ⑩ 帰りのシンガポールの港で外国青年が下船すると日本人だけになり、その後の約5日間は、様々なことを考える期間になった。初めの1、2日は、皆抜け殻のようになる。しかし3日目ぐらいになると、この経験は何だったのか、今後どうやって生かすのか、などと再構成をし始める。日本人だけでイベントをしたりしながら日本人同士の関係を修復し、結束して帰港する。

2. 事業参加後の国際ネットワーク形成や社会貢献活動について

【1】実施している社会貢献活動について

- ⑦ 「市民の自主・自立的な教育投資を促進し、“若者が挑戦できる環境”を築くことで、若者たちの挑戦を後押しし、明日の社会の担い手を育て、心豊かで活力ある日本を復興する」ことを、代表理事をしている社団法人のミッションとして活動している。

3. 参加後の自身の能力向上やキャリア形成について

【1】リーダーシップやマネジメント力向上において事業参加経験が役立っていること

- ⑦ リーダーというのは、リーダーシップ研修を受けた人になるのではなく、リーダーを必要としている場から生まれる。これまでを振り返ってみると、人をどんどん引っ張っていくリーダー、という形ではなく、ファシリテーター、調整役として、そのような立場にいたと思う。

【2】調整・交渉を進める実践的な能力向上において事業参加経験が役立っていること

< 対立するのではなく、よく話を聞いて相手の懐に入り、いっしょにやっていく >

- ⑦ 船に乗る際、たくさんの企業から協賛を集めてイベントなどを行い、成功させた。それまではあまり営業的な活動をしたことがなかったが、このことから営業活動に抵抗がなくなった。
- ⑧ 何か行動を起こす際に他人と対立するのではなく、相手の話もよく聞き、共有し、まきこんでいく。これは、船の上で多様な価値観の人と生活を共にし、衝突や議論を体験したからこそ得られた方法である。
- ⑨ 日本の教育を変えていく、という事業を立ち上げる際にも、教育現場の人達といっしょにやらなければいけない、外でビジネスだけを立ち上げてもうまくいかない、と考えた。先生たちと連携してやっていける場所はないかと探し、現在の場所を見つけた。このように、相手の中に入っていき、異文化に恐怖心がない、ということも、船で身に着けたことである。

【3】 キャリア形成や人生に関して影響を受けたこと

< 自信を持って帰国。日本の問題点への気付き >

- ① 参加前は、どちらかというと自信喪失状態だった。しかし船に乗り、自分なりのパフォーマンスが出来たし、世界の中でも通用するじゃないか、と自分なりに自信を持って帰って来られた。
- ② 船の中で、同世代の日本人の若者達が、自分のことを全く話せないことに問題意識を持ち、教育に問題があるのでは、という気持ちが立ち上がってきた。大学院を休学し、教育について考えるようになり、教育の研究機関に入った。
- ③ 教育についてのディスカッションをしていたとき、スリランカからの参加者に、学校はひとつ卒業することによってできることが増えていくはずなのに、日本人はなぜだんだん自信を失ったり、やりたいことがなくなっていくのか、なぜ明確な目標が持てないのか、と聞かれた。また、南アフリカでは、アパルトヘイトがあり貧困層はとてもひどい生活をしていたが、子ども達はすごく元気だった。フィリピンなどでも同じだそう。日本はとても豊かなのに、日本に帰ってくると、街で見かける小学生はとても疲れた顔をしている。このようなことから、教育をなんとかしなければ、という思いを強くした。
- ④ 日本人の無宗教性や、意見を言わないこと、このような特性は、ファシリテーター役として、世界中で役に立つ日本人らしいことができるのではと考えた。これはあまり意識されていないが、もっと認識して育て、守るべきことだ。
- ⑤ 船で、世界の多様性を見た。その結果、日本の一般的な価値観、一流大学を出て、一流企業に入るのが良いというような価値観に流されず、今の事業を立ち上げるに至った。
- ⑥ 他の国際交流事業の参加者と比べると、内閣府事業参加者の社会的地位が高くない、というのは分かる。社会人の参加者には、企業を辞めて参加している人が少なくない。その時点で一般的なコースを降りている。帰国してもう一度企業に勤めることが出来ないわけではないが、事業に参加し、世界の多様性を見て価値観が変われば、戻らない人が出てくる。実際、知っている人の中にも、警察官から先生になったり、アーティストになったりしていて、一般的な、世俗的な価値観の中で生きていない人は多い。

4 . 参加者ご自身について

【1】 業種

- ① 教育関連

【2】 職種

- ① 代表理事

【3】 仕事内容

- ① 市民の自主・自立的な教育投資を促進し、“若者が挑戦できる環境”を築くこと、若者たちの挑戦を後押しすること。自分で動いて、体験し、乗り越えていく、その繰り返しで人は強くなっていく。それを、体感する場が必要。このような場を地域の中に作っていく活動をしている。インターンシップ、愛知サマーセミナーなど。

5 . その他

【1】今後の内閣府事業について

< 船は2か月だけの独立国家。独自の文化が醸成され、多様な価値観を身に着けられる場 >

- ① 船の中は、2ヶ月だけの独立国。それが醸成できるだけの期間がほしい。他の国際交流事業にもいくつも参加したが、ホスト国である日本が海外の人を受け入れる、または二国間交流、という形のものばかり。内閣府の船は、時間がたっぷりあり、同じ人間だよな、という境地に至れる、あのような時間を過ごせたのがとても良かった。
- ② 今は、昔と違ってお金を出せば自分で海外へ行けるし、様々なプログラムに参加することもできる。しかし、お金を出して参加するものは、お客様として扱われるものであり、受動的に楽しませてもらえるような内容が準備されている。そうではなく、社会的価値観や日本のあり方を問うていく、ここでしかできない価値観を身に着けられる場として、内閣府事業は機能できる。
- ③ もっと資源を投入しても良いのでは。お金がないなら、民間と共同で開催しても良いのではないか。企業というより地域が、自分たちのリーダーシップ育成のためにやるのも良い。地域が、若者達に投資をしていく、という形。
- ④ これまでの参加者の中には、地域ごとに社会的な活動をしている人はいるだろう。船での体験により、固い価値観に支えられているから、ブレずにやっていける。内閣府事業は、船での生活により世界の現実を見て、それに支えらえた価値観を身に着けられる、唯一の場である。

以上

【事業で得た学びを活かしてリーダーシップを発揮】

属性	「世界青年の船」参加者	女性・30歳代 東京都在住
経歴	学生時代に代表を務めた二国間学生交流活動の発起人が既参加青年であったことから、第11回（平成10年度）に参加を決意。	
現況	参加後、社会人経験を経てアメリカの大学院へ進学し、ソーシャルワークの修士号を取得。帰国後は地域開発、組織開発、開発援助、インド駐在を経て、人材育成を行う他、インドの綿農家のオーガニック栽培への移行を支援するプロジェクトをはじめ、民間企業による開発援助に貢献するプロジェクトに従事している。	

<事業参加による意識変化、行動、社会への働きかけ>

- 1 世界船という、社会と隔絶され、知合いのいない場所で問題にぶつかり、悩み、新しいものを身につけるという経験を通じて、お互いの存在を認め合う姿勢、人の気持ちを感じ取ろうとする姿勢を身につけた。
- 1 参加後、青少年国際交流推進センターを通じて内閣府事業の地方研修の通訳や国内事業のファシリテーターを勤め、人材育成の仕事を経験した後にアメリカの大学院へ進学、博士号を取得。
- 1 帰国後は、在ムンバイ日本国総領事館の「人間の安全保障・草の根無償資金協力」の担当者としてムンバイに赴任し、ODAの資金援助のコンサルティングを行う。任期終了後、開発援助や地域開発の経験を活かして日本企業のBOPビジネスに従事した。
- 1 現在、日本企業が実施するインドの綿花農家のオーガニック栽培への移行支援プロジェクトに従事し、世界に貢献するビジネスの実現に貢献。社会に対するプロモーションや現地の農村管理などの場面において、様々な立場や意見を考慮し、皆が連携して共通の目的や方向に向かえるようにコーディネート出来るようになったのには、世界船で得た学びが大きく影響していると言える。

1. 事業参加について

【1】内閣府青年国際交流事業に参加したきっかけ・理由

<自身の将来展望を形にする入り口>

- ① 「世界青年の船」事業に参加したのは23歳の時であった。国際関係の企業に入社して1年目だったが、事業の主旨に対する社長の理解もあり、休暇をもらって参加した。
- ② 学生時代に第1期の会長として活動していた「日本インド学生会議」（2ヶ国間の学生交流）の発起人の1人が世界船の既参加青年であったことが、事業について知るきっかけとなった。素晴らしい国際的感覚と平和への意識を身につけた、尊敬すべき人が参加した事業に自分も参加してみたいという思いと、幼少の頃から持っていた世界平和に対する期待や夢、世界に友達が欲しいという思いにより、参加を決めた。

【2】参加したプログラムのうち、最も印象に残っていること、影響を受けたこと

<極限の体験を共有してこそ得られる人間力>

- ① 参加した第11回の標語は「Celebrating diversity」、「違いを喜び合おう」という意味。これは、「人は違って当たり前。違いが存在することそのものを俯瞰して、認め合えばいい」ということである。人は、育った国や背景が違えば違って当たり前。お互いの存在を認め合うという共通の目標があったため、200人以上の多くの参加者が一体感を持つことができた。
- ② 事業に参加して最も印象に残っているのはまさに、見かけや国籍は違っても「人は皆同じ」であるということ。様々な国の人たちと寝食を共にすることで受けたカルチャーショックの大きさは、参加者それぞれにとって計り知れないものだったが、だからこそ「言葉や文化や宗教が違ってても、結局人は皆

同じなのだ」ということを、様々な経験を通じて、全身で理解することができた。

- z 船上活動を開始して2週間くらいから混沌とした状態に陥っていく。社会と隔離され、知合いの誰もいない場所で参加者それぞれが問題にぶつかり、悩み、乗り越え、精神的にある程度極限の体験をしたからこそ、新しいものを身につけることができるという経験が出来るのは、世界船ならではの思う。人は枯渇してこそ、新しい何かを習得できる。日常の満たされた状態よりも、船上生活の方が学びや習得の度合いが大きいことを実感した。
- z この理解に達するには、ある程度の期間がないと難しい。「新しいものへの出会い 気持ちの高揚 混沌 収束」という学びのサイクルを考慮すると、最低でも1ヶ月半の船上活動期間は必要だと感じている。
- z 心に強く残っているのは、外国人のルームメイトがナショナルプレゼンテーションの準備で経験していた仲間との衝突を乗り越え、本番を終えてみんなで泣いている場面を見て、彼女が困難を乗り越えた様子に自分自身も感動し涙を流したこと、また英語が分からなくてもハグだけで仲間と心を通じ合わせる事ができたことなど。こういった体験を通じて、人の心を感じ取ろうとする姿勢が身についたと思う。
- z 寄港地プログラムでは気分転換が出来、面白い発見も勿論あったが、船上活動の方が断然インパクトが大きかった。
- z 世界各国だけでなく、日本国内からも様々な地域の様々なバックグラウンドを持った人が集まっているというのもこの事業の良い部分である。経歴や生活背景などは関係なく、「人としての付き合い」を前提に交流を深めるべきという考えを持った人が多く集まっていた。
- z 船上では非常に多彩なアクティビティが用意されていたが、それら以外の日々の生活、例えば食事の時間、イベント後のちょっとした立ち話のような、日常生活の些細な出来事からも、多くの学びがあった。それは、言語はいくつもある人間のコミュニケーションツールの1つでしかないこと、人は心で通じ合えるのだということ、さらに、人を理解するには人の痛みを理解出来る心の優しさが必要だということである。国内にはなかなか体験出来ない教育の場が世界船にはあり、その部分に今後もっとフォーカスして行って欲しいと思っている。

2. 事業参加後の国際ネットワーク形成や社会貢献活動について

【1】事業参加をきっかけとして、継続している国際的な交流について

< 世界中に友達がいる、繋がっている >

- z 参加したことにより、世界に友達が出来た。下船後も行き来したり、手紙やメールのやり取りをしたりして交流している。電子的な媒体を通じた交流をしなくても、世界の遠くにいる人と繋がっていると思えることにより、色々な課題を地球規模で考えられるようになった。

【2】実施している社会貢献活動について

- z 「世界青年の船」事業でのファシリテーター、グローバルリーダー育成事業の国内研修でのプロジェクトマネジメント講義を行った。また、今私が従事しているプロジェクトを実施する企業に、世界青年の船事業の国内研修を受け入れてもらい、プロジェクトを基にしたCSRセミナーを開催する等、政府事業や教育との民間連携を促進し、世界青年の船事業への参加からこれまでに培った知識や経験を生かしつつ、政府事業の発展と青年育成に貢献している。
- z 日本インド学生会議のサポートをするほか、既参加青年の有志が実施したフィリピンのチャリティー

イベント等をおこなった。

【3】 語学力や国際的に通用する資格取得等、自己啓発で行っていること

- ① 参加後、社会経験を経てアメリカの大学院へ進学。地域開発を専攻、ソーシャルワークの修士号を取得した。また、AI(Appreciative Inquiry)という、個々人のポジティブな意識を引出し、組織全体の目標を皆で実現するための組織開発の手法のサーティフィケートを、アメリカにて取得した。

【4】 事業で得た人脈やネットワークが仕事や社会貢献活動に役立っている例

- ① 参加後、勤務先の倒産、希望していた仕事に就けなかったことなど挫折も経験したが、他の参加者の事務所で勤務しつつコーチングやファシリテーションの方法を学び、海外での開発関係の仕事に従事するなど、人脈を通じて新しいチャンスを手繰り寄せていった。

3. 参加後の自身の能力向上やキャリア形成について

【1】 調整・交渉を進める実践的な能力向上において事業参加経験が役立っていること

<それぞれの立場に心を向けて、ひとつにまとめるリーダーシップ>

- ① 現在仕事で担当している案件では、社会に対するプロモーション、現地の農村管理などの場面で関係者の意見をまとめたりコーディネートしたりする能力が問われる。世界船で様々な立場の人がいることを考慮する姿勢を身につけ、みんながうまく1つの目的や方向に向かって進めるようにコーディネートできるようになったことは、プロジェクトを進める上で非常に役立っていると思う。

【2】 キャリア形成や人生に関して影響を受けたこと

<人間の根本の力を育てるのが世界船>

- ① ピンチに陥らないと人は真剣にならない。今の日本は平和に慣れてしまい、心の豊かさを失っている。生きることは何か、生きるために人にとって必要なものは何かを一人ひとりが真剣に考え、自分にとって必要なものを取捨選択していくことによって人間のコアの力が育つ。船上では誰もが一度は精神的に危機的な状況に陥り、多少なりともパニックを経験し、そこから自分自身のコントロールの仕方や問題への乗り越え方を学び、切り開いていった。人間を根本から育て、自立させることが出来るのが世界船だと思っている。
- ② もう1つ世界船で身につけたのは相手の気持ちを慮る心である。人と何かを共同でやっていく際、そのような心の豊かさ、優しさがあることにより、衝突は緩和される。

【3】 現在の会社や所属機関等から期待されている役割

<「世界平和と人の幸せ」が判断の軸>

- ① 帰国後～現在は、平和の実現に向け、みんなが協力したいと思えるような環境を、仕事を通して構築している最中である。皆がお互いの違いを認め、自分の特技を生かしながら協力してより良い社会を作っていくためのコーディネートをしていきたい。
- ② 仕事の取捨選択における判断の軸は人の幸せと世界にとって役立つことや平和の構築に関わっているかどうか。その思いは世界船に乗ってより一層強く、具体的になった。
- ③ 今後はもっと自分を有効活用していきたい。今は大手企業と仕事をしていることで自分の気持ちが

安定しがちだが、本来の自分のミッションをもう一度見つめ直し、みんなの平和、みんなの共通の目的のために自分の辿るべき道を考え、選んでいきたい。

4. 参加者ご自身について

〔1〕 仕事内容

< 社会経験を経てアメリカの大学院へ進学 >

- ① 事業参加後は復職したが、勤務先が倒産し、離職。一般財団法人青少年国際交流推進センターを通じて、地方研修では通訳、国内事業ではファシリテーターを勤め、人材育成の仕事を経て、アメリカの大学院に進学、修士号を取得。ソーシャルワークについて学ぶ一方、オハイオ州クリーブランド市の貧困地域の NGO や市政府の地域開発局でのインターンも経験する。

< インド農家支援プロジェクトのために >

- ① アメリカから帰国後は、在日本国総領事館の「人間の安全保障・草の根無償資金協力」の担当者としてムンバイに赴任し、ODA の資金援助のコンサルティングを行っていた。任期終了後、過去の経験を生かして、現地日本企業の BOP ビジネスに従事した。
- ② 3 年のインド滞在後帰国し、世界平和を実現するためのアクターを繋げるという信念に基づき、現在は大学の講義や内閣府事業の研修を単発で行うほか、日本の企業が実施するインドの綿花農家のオーガニック栽培への移行支援プロジェクトに従事している。この取り組みでは、世界青年の船事業で得た国際感覚を生かし企業と国際機関との連携を促進するほか、ビジネスを通じた社会への利益の創出に向けて、取り組んでいる。

5. その他

〔1〕 今後の内閣府事業について

< 長期的視点にたち、有効な効果が得られる事業に >

- ① 航海期間は最低でも1ヶ月欲しい。国内航海の(携帯がつながる等により)日本人が安心してしまう環境ではなく、全員が危機的な状況で共通の体験をすることが必要だと思う。
- ② 寄港地活動が今後更によりよいものになっていくためには、出来るだけ現地の人の生活に近い活動をしていくのが良いと思う。短い時間でも現地の人の家を訪ねる機会を設けるなど、初めて出会う人たちとの触れ合いの体験をすることで、参加者へのインパクトは一層大きくなると思う。

以上

【事業で得た気づきから、留学等に挑戦】

属性	「東南アジア青年の船」参加者	女性・20歳代 東京都在住
経歴	内閣府が大学で実施した青年国際交流事業の説明会に参加し、どこにも属さない船上でのプログラムがあることに惹かれ、第38回（平成23年度）に参加を決意。	
現況	参加後、イベント会社へのインターンやシンガポール留学、日本人受け入れのスタディツアーを企画・運営。来春より、外資系IT企業の営業職として就職。	

<事業参加による意識変化、行動、社会への働きかけ>

- 1 フィリピンで初めてスラムを見て、衝撃を受けた。一方で、参加青年と接していくことで、フィリピンは一見貧しくて何も無いように見えるけれど、家の中は温かい家庭で歌や踊りがあり、仲良く暮らしていることも知り、多様な角度から国を見る大切さに気付いた。
- 1 また、船の中で異文化理解マガジンを作ろうとしたが、出来なかった経験を踏まえ、帰国後、想いを形にする力、実行する力を身に着けたいと思い、イベント会社へのインターンを実施。
- 1 事業参加後、シンガポールに留学し、その期間、日本の学生を対象とした現地目線で人を関わる国際交流プログラム（スタディツアー）を企画。企画・運営にあたっては、同期の参加外国青年、世界船OBの日本人等のネットワークを活用して実施。
- 1 来年度から、外資系IT企業の営業職としてキャリアをスタートさせる。将来は、場所を越えて人と人をつなげたり、個人が社会に対して発信できる場所をITの力も活用してつくり、新たな国際交流の姿を実現したい。

1. 事業参加について

【1】内閣府青年国際交流事業に参加したきっかけ・理由

<船上研修は国際交流の理想の形>

- ① この事業を初めに知ったのは、内閣府が大学で説明会を開いた時。もともと、国際交流が好きだった。内閣府のプログラムは、どこの国にも属さない船上で、というのが、自分で考えていた国際交流の理想の形に近かった。絶対応募しようと思った。
- ② 国際関係、国際政治経済を学ぶ中で、現場を知る必要性を強く感じていた。途上国の各国でのホームステイがプログラムにあったので、その国のリアルな現状を見ることができると思った。
- ③ 海外に興味を持ったきっかけは、中学2年生のときに、イギリスで3週間のサマースクールに参加したこと。英語を母国語としない子ども達が集まったの活動だった。言語や肌の色、バックグラウンドが違って分かりあえることに衝撃を受け、感動した。出身地など関係なく、今現在のありのままの自分を見てもらえることが心地よかった。そのときの経験から、大学は国際関係に進もうと決めていた。

【2】参加したプログラムのうち、最も印象に残っていること、影響を受けたこと

<人との交流の大切さ>

- ① 初めて途上国を見て、衝撃を受けた。フィリピンで初めてスラムを見て、放心状態で船に戻った。しかしその後、船で仲良くなったフィリピン人と話していく中で、フィリピンは一見貧しくて何も無いように見えるけれど、家の中は温かい家庭で歌や踊りがあり、仲良く暮らしていける、日本はとても豊かなのに、なぜこんなに自殺者が多いのか、などと聞かれたりし、違う価値観に気付いた。
- ② ただ行って、見て帰ってくるだけでなく、その国の人たちと語ったり、寝食を共にする中で、その国の人たちが何を考えているのかが分かる。そこがとても重要だと感じた。この経験から、後に国際交流プログラムを立ち上げたときに、人との交流を大切にして企画した。

- ① ディスカッショングループで、インドネシア語を話そう、という企画をしたが、なかなかうまく進められなかった。他国の参加者の、時間にルーズなところなどに煩わされた。しかしそれには徐々に適応した。
- ② どの国でもホストファミリーはとても良くしてくれた。国も言語も違う、様々な家族の形を見られたことはとても良い経験になった。
- ③ シンガポールは寄港地ではないが、船内活動などからとても印象に残っている。「多文化共生」を国のアイデンティティとして打ち出しており、それまでに異文化理解などについて学んでいたため、とても興味を持った。それが、後にシンガポールに行くきっかけになった。

2. 事業参加後の国際ネットワーク形成や社会貢献活動について

[1] 事業参加をきっかけとして、継続している国際的な交流について

- ① 事業参加後、シンガポールに留学し、そこで現地の日系企業でインターンシップをし、また日本の学生を対象としたスタディツアーを企画した。(詳細は後述)
- ② シンガポールのスタディツアーをいっしょに実行した友人たちは、昨年日本に遊びに来てくれた。東南アジアの国々は近いので、お互いに行き来できる。

[2] 事後活動組織において実施している活動について

- ① シンガポールに滞在中は、シンガポールの事後活動に参加していた。また、40期の参加青年の出航前トレーニングにも参加し、日本の文化を教えるなどもした。

[3] 実施している社会貢献活動について

< たくさんの人に、国際交流を広めたい >

- ① シンガポールでのインターンシップ中、日本の学生を12名受け入れたスタディツアーを企画した。(詳細は後述)
- ② スタディツアーを企画したのは、ずっと国際交流に関わってきて、自分にしかできない、自分の理想とする国際交流、現地目線で人と関われる国際交流プログラムを実現したかったため。東南アジア船は、現存する国際交流事業の中では最高峰だと思っているので、それに参加した後は、もう自分で作るしかないと考えた。たくさんの恩恵を受けたので、他の人にも、異文化理解、国際理解を身近に感じてほしいと思った。

[4] 事業で得た人脈やネットワークが仕事や社会貢献活動に役立っている例

< ネットワークは事業参加で得た一番大きなもの >

- ① シンガポールで企画したスタディツアーは、内閣府事業でのネットワークを最大限に活用した。スタッフとして、同期のシンガポール参加青年や世界船OBの日本人、内閣府事業の韓国派遣参加者など、またホームステイのサプライヤーもシンガポールの参加青年が協力してくれた。
- ② このスタディツアーは、シンガポールへ行く前から企画していた。ネットワークがあったから使ったのではなく、むしろはじめから、ネットワークを生かしたいと思って企画した。
- ③ 意識して組み込んだプログラムは、フィールドゲーム。オリエンテーションの意味も兼ねた、たくさんの課題に取り組むゲームで、日本の学生と現地学生の混合チームの対抗戦。「カフェでコーヒーを注文しよう」というような課題があり、日本とシンガポールの同じところ、違うところに気付きを促す。

日本とシンガポールは、一見ほとんど同じように見えるけれど違って、もちろん同じところもある。このゲームでシンガポールへの理解が早まり、またチーム内のコミュニケーションや結びつきを促すこと、現地の人と交流する機会を持ってもらうことも目的だった。現地の学生にも好評で、自分たちも気付かなかった独自の習慣や文化に気付いてよかった、という声もあった。

- ⑦ 東南アジア船に乗って、異文化適応力やコミュニケーション能力は身に着いたとは思いますが、それは、他の国際交流プログラムや留学でもできることだと思う。得たものの中で大きいのはやはりこの事業のネットワーク。このネットワークがあったからこそ、単身でシンガポールに行ってもスタディツアーの企画ができたし、シンガポールでの事後活動にも参加し、世代を越えて年配の事業参加OBと話す機会もあった。どこへ行っても、「We are SSEAYP family!」と歓迎してもらえる場所があるのが心強い。
- ⑧ 留学先の大学にもシンガポールの参加学生がいて、学生団体の代表をしており、いっしょに活動に参加させてもらったことも貴重な体験だった。
- ⑨ 国際交流が本当に好きなので、いつ、どこにいても国際交流ができる環境を手に入れられたことがとても大きい。

3. 参加後の自身の能力向上やキャリア形成について

〔1〕 調整・交渉を進める実践的な能力向上において事業参加経験が役立っていること

- ⑦ 事業に参加し、異文化コミュニケーション能力を身に付けられた。それまでもやっていたが、選りすぐりの高レベルな参加者ばかりの中では、初めは委縮してなかなか発言もできなかった。しかし自分は最年少で、できなくて当たり前だと開き直り、どんどん挑戦していった。
- ⑧ 船で過ごす中で、少しずつディスカッションでも発言できるようになり、意見も聞けるようになった。その経験から、後のイベント企画時や留学先の大学で学生団体に参加した際にも、様々なバックグラウンドを持った人たちの中でもうまく振る舞えるようになった。

〔2〕 キャリア形成や人生に関して影響を受けたこと

< 質の高い集まりの中で受けた大きな刺激 >

- ⑦ 事業に参加した際は、最年少だったこともあり、自分の出来なさを痛切に感じた。周りの人に圧倒された。
- ⑧ 船の中で、異文化理解のマガジンを作ろうとしていたのに、結局できなかった。そこから、思いを形にする力、実行する力を身に着けたいと思い、イベントの企画をしたり、インターン先にもイベント企画会社を選び、ノウハウやスキルを身に着けた。
- ⑨ 参加者は、大学4年生や大学院生が多かった。自分は年齢も低いし経験もなかった。日本参加青年も他国からの青年も、自分にとっては会うだけで刺激になる優秀な人の集まりで、質の高いネットワーク。そのため、日本人参加青年に会うことでも大いに刺激を受けるモチベーションになる。
- ⑩ 参加時の年齢が低いほど、受ける影響は大きいと思う。選択肢が広いうちに影響を受けている。日本人に限らず、そうだと思う。
- ⑪ シンガポールでの留学とワーキングホリデー、ワーホリ中にはインターンも経験し、会社で働くこと、自らイベントを企画・運営をしたことで大きなインパクトを受けたが、国際交流事業・異文化体験においては、何よりも東南アジア船のインパクトが断然強い。

4. 参加者ご自身について

【1】現在の状況

- ① 学生

【2】就職・これからのこと

< IT 企業でこれまでの経験を生かし、さらにスキルアップ >

- ① 外資系 IT 企業の営業職に就職が決まった。IT 業界を志望したのは、移り変わりが激しく前向きな業界であり、その中で自分が成長できると考えたため。IT の営業は、自分で工夫しながら相手の課題解決に貢献し、目に見えないものを売っていく仕事。この仕事を通して、マネジメント力、問題解決力を身に付けていきたい。また何か問題が起きた時、それをどう改善したらいいのか、計画を立てて周りをまき込んで実行していけるような人になりたい。
- ② 長期的な目標は、国際交流をしてきた中で限界だと思ったこと、できなかったことをやりたい。場所を越えて人と人を繋げたり、個人が社会に対して発信していける場所を IT の力で作り、国際交流にも貢献したい。
- ③ どんどんチャレンジしていける、柔軟性のある会社を選んだ。ここが自分に合っていると思えた。外資に限定して探したわけではない。
- ④ 面接では、スタディツアーで国と国とのギャップに気付かせるようなゲームを企画したことなどを話した。就職先の会社では、海外の製品を日本に持って来たり日本の製品を海外で売ったりしており、そのような場面でも自分の異文化適応力を生かせると思う。

5. その他

【1】今後の内閣府事業について

- ① 日本での地方プログラムでいっしょだったフィリピンからの参加者と仲良くなっていたため、初めての寄港地であるフィリピンでのホームステイの後に、衝撃を受けたことをすぐに話すことができた。出航までに関係を作っておく、という点で、国内活動には意義がある。
- ② 船に乗る期間は、私は 53 日間だったが、ちょうど良いと思う。2 週間ぐらいでは短すぎるし、少なくとも 1 か月が必要。コミュニケーション、人と人との関係には、良くなって落ち込んで、また良くなって落ち込んで、また良くなる、という波がある。その期間が必要。

【2】その他

< 「現地の目線」が大切 >

- ① シンガポールにいたとき、強く感じたのは外国人コミュニティとローカルの人の社会のギャップ。外国人コミュニティは外国人コミュニティの中だけでビジネスをして、住むところも食べるものも現地の人とは違い、それで完結してしまっている。しかし、日本企業はアジアの人々に製品を売っていくとしていて、そこには異文化理解が足りていない。
- ② 学生の若いうちから、海外に出るだけでなく、そこで現地の人々がどんな生活をして何を考えているか知る機会をもってほしい。そして後に仕事で海外に駐在することがあっても、現地の人と違う生活をするのではなく、積極的に交流し、現地の目線を持ってほしい。

以上

【事業での出会いと経験から看護師の道へ】

属性	「東南アジア青年の船」参加者	男性・20歳代 長崎県在住
経歴	高校2年時に、一般企業主催の国際交流プログラムで約3週間アメリカへ。高校卒業後は大学の通信課程に進み、フィリピンのストリートチルドレンを支援するNPOでの活動を開始。寄港地の多さに魅力を感じ、より東南アジアに触れたいと思い、「東南アジア青年の船」第35回(平成20年度)に参加を決意。	
現況	東南アジア船での経験から、看護師の道に進むことを決心。今年の4月から大学で看護学を専攻している。	

<事業参加による意識変化、行動、社会への働きかけ>

- 1 事業参加時には大学の通信課程の法学部に在籍していたが、東南アジア船のプログラムで障がい者施設などを見学したことや、船上で体調を崩した時に看護師の方にお世話になり、その働きぶりを見たことで、看護師の仕事に興味が生じた。
- 1 参加青年には、事業参加をきっかけとして大学院に進んだ人、新たな職業を選択した人など様々な経験・経歴を持った人がおり、そのような人たちと出会ったことで、自分はまだ新しいことにチャレンジするのに遅くはないと思い、看護師になる決心をした。将来は、海外で活躍できる看護師を目指す。
- 1 参加後も、事業の経験を活かして、所属していたフィリピンのストリートチルドレン支援活動において、九州地区の活動の運営を担当し、リーダーシップを発揮していた。

1. 事業参加について

【1】内閣府青年国際交流事業に参加したきっかけ・理由

<複数の国際交流事業への参加>

- 2 内閣府事業に参加する1年前に、福岡県からの派遣で「グローバルウイング」という国際交流事業に参加した。参加者は国際交流に興味がある人が多く、情報交換する中で内閣府事業のことを知った。世界船の既参加者もいた。また、本事業の県の担当者が、内閣府事業の担当者でもあったため、話を聞いた。
- 2 グローバルウイング事業は、期間は10日間ほど、イギリスとオランダに行き、環境、教育などの分野に分かれ、学校や障害者施設の見学に行くなどした。移動手段は飛行機であった。
- 2 そもそも高校2年生の時に、保険会社AIUによる高校生対象の国際交流プログラムに参加して、国際交流に興味を持つようになった。50人弱で約3週間、行先はアメリカだった。これは高校の英語の先生が紹介してくれた。
- 2 内閣府事業は、寄港地が多いのが魅力だった。たくさんの国を訪れて、見てみたいと思った。
- 2 内閣府事業への参加を決めた当時は、フィリピンのストリートチルドレンを支援するNPOに入っていて、フィリピンにはそれまでに2回訪れていた。

【2】参加したプログラムのうち、最も印象に残っていること、影響を受けたこと

<親しみやすく印象に残ったタイ>

- 2 最も印象に残っているのは、ホームステイである。5ヶ国のホームステイの、特にタイが一番印象に残っている。参加青年のお兄さんの家だった。気軽にあちこち連れて行ってくれるなど、兄貴分、という感じで親しみやすく、お父さんとお母さんがいて、という一般的な家庭の中に入るより近い距離で交流ができた。

- ① タイでは、知らない人にも笑顔で声をかけてくれる。また英語がそれほど得意でなくても何とかしてコミュニケーションを取ろうとして、温かくもてなしてくれた。
- ② ディスカッションは教育のグループだった。東南アジアでは学校にいけない子どもが多いが、日本では教育は与えられて当たり前のように思っている人が大多数である。アジアの国々の人は、貧しさを改善するためには教育を受けることが必要で、その教育は自分から取りに行くものだと考えている。一生懸命勉強し、奨学金を取って大学に行くなど、勉強できる環境を自分で作っている。
- ③ 内閣府事業に参加する際、参加者は名刺を作るが、その名刺を作る係になった。どのような名刺にするか、アンケートを取ったり集計したりしてデザインを決め、お金の管理や印刷業者とのやり取りもした。当時は20歳だったので、業者とやり取りすること・価格の交渉・お金の管理など、社会勉強になった。

2. 事業参加後の国際ネットワーク形成や社会貢献活動について

【1】 事業参加をきっかけとして、継続している国際的な交流について

< 親くなったブルネイ参加青年 >

- ① 東南アジア船参加者の同窓会である SIGA に、2、3年前の日本での開催だったときに参加した。同じグループだったブルネイ参加青年も来ていて、彼とは今も SNS などでも連絡を取り合っている。
- ② ブルネイの参加青年とは基本的に英語でコミュニケーションを取っているが、お互いの言語を2人とも勉強しているので、少し、インドネシア語と日本語も使っている。

【2】 事後活動組織において実施している活動について

- ① 事業参加の翌年に、東南アジア船の地方プログラムの北九州セクションでの受け入れ実行委員長を担当した。

【3】 実施している社会貢献活動について

- ① フィリピンのストリートチルドレン支援活動には22歳頃まで参加していた。具体的な活動内容は、フィリピンへのスタディツアーの実施、高校へ出向き、ストリートチルドレンの状況についてなど話すこと、自動販売機を設置できる場所を探し、それによってメーカーから得られる収入を寄付すること、などである。

【4】 参加をきっかけとして、異文化理解や自国文化の理解のために日頃取り組んでいること

- ① 参加の半年ほど前から茶道教室に通い、船上でのクラブ活動で茶道を選択し、お茶を点てるなどの活動をした。帰国してからもしばらく茶道教室に通っていた。

【5】 語学力や国際的に通用する資格取得等、自己啓発で行っていること、

- ① 帰国後、インドネシア語を約1年間習っていた。船でブルネイ人と仲良くなり、インドネシア語であいさつしたりしていたので、もっと覚えたいと思ったことがきっかけになっている。

3. 参加後の自身の能力向上やキャリア形成について

【1】リーダーシップやマネジメント力向上において事業参加経験が役立っていること

- ① 成人式で実行委員長をした。それは教育委員会から指名されたが、中学で生徒会活動をしていたメンバーが選ばれたようだった。
- ② 中学、高校と生徒会活動をしており、高校では会長も務めた。どんどん皆を引っ張っていく、というタイプではないが、全体を見渡して調整していくような役割を目指した。

【2】調整・交渉を進める実践的な能力向上において事業参加経験が役立っていること

- ① 人とコミュニケーションを取る際、日本人は待っていてくれるところがあるが、船に乗ったら外国人はそうではなかった。自分から率先して話しかけるようになった。
- ② 船のグループ内で意見の相違が発生すると、皆で話し合っ解決した。これは自分自身にとっても良い経験になっている。

【3】キャリア形成や人生に関して影響を受けたこと

< 看護師を目指す決心 >

- ① 事業参加当時は通信制大学の法学部に在籍していたが、現在は、看護師になるために大学に入り直し、看護学を専攻している。内閣府事業の中で障がい者施設などを見学したことや、船上で体調を崩した時に看護師の方にお世話になり、その働きぶりを見たことがきっかけになっている。
- ② 参加青年には様々な経験をしている人がいた。事業に参加するために仕事を辞めた人、事業参加をきっかけとして大学院に進んだ人など。そのような人たちと出会い、新しいことにチャレンジするのに自分はまだ遅くはない思い、看護師になる決心をした。
- ③ 参加当時は20歳で、参加者の中では最年少のグループであり、たくさんの年上の参加者と出会い、様々な生き方、これからの選択肢があることを実感した。
- ④ アジアの国々を見たことで、途上国で働きたいとも考えている。そのひとつの可能性として看護師を選んだところもある。

4. 参加者ご自身について

【1】現在の状況

- ① 看護師になるために大学に通っている。

【2】就職・これからのこと

- ① 卒業後は、何年かは看護師として働いてキャリアを積み、その後は青年海外協力隊に参加するか、または大学院に進学したいと考えている。

以上

【事業のネットワークを活用した起業】

属性	「東南アジア青年の船」参加者	男性・30歳代 京都府在住
経歴	英国大学院への留学、社会経験（金融アナリスト）を経て、28歳の時、第36回（平成21年度）に参加。	
現況	事業参加で培った人脈を生かして起業し、インドネシアからの輸入原材料を活かした製造・販売業を営む傍ら、昨年には東南アジアから日本へ進出を計画する企業向けコンサルティング会社も設立。	

<事業参加による意識変化、行動、社会への働きかけ>

- 1 事業では、海外からの参加青年との議論に「知的な楽しさ」を感じるとともに、その優秀さを目のあたりにして危機感を感じる。アジアの貧困問題の解決に関心があったが、むしろ発展するアジアの国々の勢いにのった事業を立ち上げるべきと決意。
- 1 参加後、1年でインドネシアのカカオの品質向上支援、輸入、加工販売を行う会社を創業。創業にあたっては、同期の事業参加青年から生産地スラウェシ島の生産者を紹介してもらい、現地情報を収集。さらに、30年以上前の事業OBでインドネシア大使館関係者の協力を得て輸入ビジネスを事業化。ほぼ全ての大手百貨店や有名ホテルとの取引を結んだほか、約20のビジネスコンテスト受賞や各種助成金を授与され、日本と海外を結ぶ地域の創業事例として注目を浴びている。
- 1 事業で得たものを社会に還元するという意識から、社会貢献活動として、事業参加後から創業までの経緯や国際理解等に関して、全国の小中学校、大学にて講演を続けている。

1. 事業参加について

【1】内閣府青年国際交流事業に参加したきっかけ・理由

<しっかりと経験を積んだ上での再参加>

- ① 平成13年度の事業では事故があり、プログラムがかなり短縮された。そのため、30歳までならもう一度応募する権利が与えられた。次の年にでも再度参加することはできたが、もっと経験を積んでからの方が得られるものも大きいと思い、留学、大学院への進学、外資系金融機関での勤務などを経て、再度、平成21年度に参加した。
- ② イギリスの大学院では比較社会政策を専攻。主な内容は、年金、労働市場、貧困、などの社会問題。
- ③ 元々は国連などの国際機関で働きたいと考えていた。しかしヘッジファンドで働くうち、その方面への興味が薄れ、あらためて自分の関心はアジアの貧困にあることを認識した。そのタイミングでの、会社を辞めての参加だった。
- ④ 会社を辞める際から、うっすらと起業することは考えていた。内閣府事業で得られるネットワークを次につなげていくつもりだった。

【2】参加したプログラムのうち、最も印象に残っていること、影響を受けたこと

<レベルの高い海外からの参加青年達>

- ① 海外からの参加青年は、日本の青年に比べると際立ってレベルが高い。同じ18 - 30歳だが、選考の倍率が桁違いで、例えばインドネシアでは30人の枠に対して1000人を超える応募がある。また、州や県による制約もあり、何百人中の1人、というエリート中のエリート。学業優秀、英語が話せる、といったようなことだけでなく、自国の文化を学んでいて、ダンスや歌もできるような、オールマイティな人材が集まっている。

- ① このように優秀な海外青年達は、将来のビジョンもあり、ものの見方が全く違う。例えばプログラムにはディスカッションがたくさんあったが、ボランティアについて話すと、日本人参加者は、「ボランティアに参加したことがあります」、「ボランティアのこんなところがいいと思います」、などと発言するのに対し、海外の参加者は、「タイではボランティアには政府でこのような奨励策があって、・・・」、「ある企業では、ボランティア休暇の制度はこうで、取得率はどのくらいで、・・・」というような発言になる。裏付けがしっかりとあり、話が深い。日本人でそのような話ができる人は、ほんの一握りだった。
- ② このような環境は、とても楽しかった。おもしろおかしく楽しいのではなく、知的に楽しかった。
- ③ シンガポールでは障がい者の施設を訪問した。このような分野にはそれまで接点がなかったが、実情を見て説明を受けたりすると、考えさせられることがあった。個人旅行ではまず見るできない、このような他国の政策を見られることも、内閣府事業の醍醐味のひとつだと思う。
- ④ ホームステイはとても良いプログラムだと思う。大学や大学院ではアジアに関して勉強したが、データでしか見ていなかった。現地で見えたら、みんな幸せに暮らしていたり、高齢者を家族で支えるシステムが出来ていたりする。このように、データや数字ではなく、実際に自身の目で見ること・体験することが、この事業の特徴である。
- ⑤ 1回目と2回目のどちらでもホームステイを経験し、その違いに大変驚いた。1回目はフィリピンで、10人くらいで雑魚寝をし、ほとんど身動きも取れなかった。だが2回目の参加時は、皆かなり裕福な家庭で一人一部屋を与えられ、インターネットが使えるので部屋から出て来なかったり、ショッピングに連れて行ってもらったりしていた。これは、ホストファミリーに富裕層が多いためでもあるだろう。

2. 事業参加後の国際ネットワーク形成や社会貢献活動について

〔1〕 事業参加をきっかけとして、継続している国際的な交流について

- ① 現在のチョコレートショップの起業時や、これからやっといこうとしている、インドネシアを日本に、日本を東南アジアに紹介していく取組みに、ネットワークを大いに活用している。(詳細は後述)

〔2〕 実施している社会貢献活動について

< 学生や子供たちへの啓発活動 >

- ① 1回目に参加した後は、地元で通訳ボランティアなどをしていった。
- ② 現在は、大学などでの講演や、また幼稚園・YMCAなどでチョコレート教室を開くこともある。チョコレート作りをきっかけに、カカオ豆のことやインドネシアのカカオ農園で働く人々のことなど、国際理解やフェアトレードについて話しをする。中学校や高校に呼ばれることもある。これらの活動は、事業で得たものを、社会に還元しているという意識で行っている。
- ③ 講演などを聞きに来てくれる学生は、そもそもやる気のある学生達で、大きな刺激を与えることができていると思う。自分が学生の時にこんな話を聞いたらよかったな、と思うことを、今の学生達に話している。
- ④ 国際協力・交流などに興味のある学生は皆、NGO、NPO、JICA、JETROなどしか見ておらず、選択肢が狭くなっている。かといって一般企業に就職すると、国際協力とは縁遠くなってしまふ。しかし選択肢はそれだけではなく、考え方と実行力があればほかにもできるこ

とはある、ということ伝えてる。

【3】 事業で得た人脈やネットワークが仕事や社会貢献活動に役立っている例

< 重要なのは、縦の繋がり。それをビジネスに生かす >

- ① カカオがインドネシアで採れると知った時、すぐに、知っているインドネシアの参加青年に連絡を取り、話を聞くことができた。カカオの生産地であるスラウェシ島からも内閣府事業の参加者はいたが、話したことはなかった。しかしすぐに彼が繋いでくれた。そこから、彼らを頼って現地に赴き、カカオの状況を知ることが出来た。
- ② 内閣府事業の良いところはネットワークだが、特に、縦のネットワークが重要。初めにインドネシアのカカオの状況について知ることができたのは同期の紹介から紹介で繋がったおかげだが、その後、本格的に事業を立ち上げるまでには、縦のネットワークが大いに役立った。30年ほど前の参加者がインドネシアの日本大使館で副大使を務めていた。この繋がりがなかったら、これほどスムーズに起業はできなかつたろう。
- ③ タイにも他の国々にも、内閣府事業のOBには外交官などの要職に就いている人がたくさんいる。日本にもいるだろう。縦のつながりをもっと生かすべき。その繋がりを生かせたかどうか、事業参加経験を生かせたかどうかだと思ふ。
- ④ 先月、台湾の展示会に、内閣府事業OBといっしょに出展した。そのOBは99年あたりの参加者で、その後も管理部員として参加され、タイの大使館勤務などを経て会社を立ち上げ、タイの良いものを日本に持ってきたり、日本のものをタイに紹介したりしている。あまり話したことはなかったが、お互いOBだということでfacebookをきっかけに繋がることできた。彼も、もっとネットワークを活用したいと言っている。
- ⑤ また、そのOBは内閣府事業の彼のネットワークで、シンガポール、タイ、マレーシアやベトナムなどの人と、日本のものを各国に紹介していく、日本の物産展のような、ジャパンフェアを開く準備をしている。それを私も手伝っている。
- ⑥ ネットワークで、地域でのボランティアなどはやっても、ビジネスの場ではこれまであまり活用されていないのでは。最近やっと、少しずつ出てきているように思う。
- ⑦ お店がメディアに取り上げられることが多いが、ネットワークがきっかけになることもある。内閣府事業に参加した青年のブロック大会などで今やっていることを話すと、おもしろい取組をしているから紹介してみる、などと言ってもらえることがある。

3. 参加後の自身の能力向上やキャリア形成について

【1】 キャリア形成や人生に関して影響を受けたこと

< 優秀な海外青年を見て分かった、世界の中の日本の状況 >

- ① 海外からの参加者の優秀さを目のあたりにして、このままでは日本は負けると思った。危機感を感じた。それまでは、自分の方向性としてはアジアの貧困、と考えていたが、遅れているように見えるのはデータ上だけのことで、これほど優秀な人たちがいたらすぐに発展する、日本はいつまでも上からの目線で接しているべきではない、むしろ、これらの国の勢いに乗るべきだと考えた。今後取り組んでいくのはNGOやNPOではなく、もっといっしょに、リードできる人同士でできることがいいと考えた。
- ② 日本はアジアの国々を下に見ているところがあるが、海外の人はそのように考えてはいない。

ゴールドマンサックスなどのレポートでも2050年にはインドネシアが日本のGDPを抜く、とあるように、もっと長いスパンで見ている。事業の参加者でも外国の青年達はそのようなことを分かっていた。日本は、今と過去しか見てない。

4. 参加者ご自身について

【1】業種

- ① チョコレート製造・販売

【2】職種

- ① 代表取締役

【3】仕事内容

- ① カカオを通して世界を変えてゆくこと。
- ② 講演、チョコレート教室開催による、幼稚園・障がい者施設・国際交流協会などでの啓発活動、メディアへの広報活動など。

5. その他

【1】今後の内閣府事業について

- ① 予算削減のために期間を短くせざるを得ないなら、質を確保するためには人数を減らすこともひとつの方法かと思う。300人もいると、初めの2~3週間は自己紹介ばかりで表面的な会話しかできない。人が少なければ、自己紹介に費やす時間が少なくて済む。
- ② ネットワーク、特に縦のネットワークが重要。活用できている人がほとんどいないのでは。この事業に参加したことが、ただのいい思い出になってしまっているのはもったいない。
- ③ 過去の参加者が、その後どのような経歴で今はどこにいるかなど、分かると良い。事業参加者OBのSNSのようなものがあれば入る人は多いと思う。
- ④ 情報誌でも、壮行会の報告などよりは、今この人はこのような活動をしています、というような内容をもっと増やしていくなど、もっと皆を繋げていってほしい。

【2】チョコレートショップ設立まで

- ① 起業するにあたり、船を降りて(2009年12月)からチョコレートショップ設立(2011年3月)までの期間は1年と少し。チョコレートと決めたのは2010年の10~11月くらいで、そこからは2、3か月で形にした。金融機関で会社の分析などをしていたし、資金調達については特に心配していなかった。起業塾に通うなどの起業準備はしてない。どのビジネスだったらいけるか、という点はかなり考えたので、チョコレートに決めるまでが1年近くかかっている。
- ② インドネシアは、カカオの世界有数の生産国であるにもかかわらず、日本ではわざわざはるか遠くのガーナなどから輸入している。調べてみたところ、カカオ豆をチョコレートにする過程では豆を発酵させることが必要で、しかしインドネシアでは発酵させていないため、低価格でしか売れない。このようなことが分かり、発酵方法を独学で学び、カカオ農家に発酵の方法を説いてもらった。

- ① カカオ豆の価格は、国際相場で決まる。投資家は、景気が悪くなると企業の株よりも供給に限りがあり価格の上昇が望めるコモディティに賭ける。日本の景気が低迷している間にカカオの価格は3.5倍にも上がっている。しかし、インドネシアのカカオ農家の所得は増えていない。そもそも彼らはチョコレートを食べたこともない。カカオの価格を動かしているのは93%がヘッジファンドで、残りの7%がネスレや森永などの需要に基づいている。このような世界の現状は何かおかしいと思った。
- ② カカオ豆を、インドネシアから日本へ自分で輸入した。しかし、金融はやってきたが輸出入は経験がない。港から、コンテナが着いた、と電話がかかってきた。住所を書いたので家まで届けてくれるものだと思っていた。
- ③ カカオ豆が届いたら、お菓子メーカーにチョコレートを作ってもらおうと考えていた。原料の卸なら1人でもできる。しかし、大手のメーカーはすぐに新しい豆に変えるようなことはできなかった。外注で工場を借りることはできたが、半日工場を稼働させてチョコレートを作るのにカカオが何10トン必要、費用は何百万円、というような話で、とても無理だった。
- ④ そこで自分でチョコレートを作ろうと思い、調べたら、メーカーが使っている機械を作っている会社が日本に2社ある。しかし問い合わせしてみたところ、機械は一式5億円もすることが分かった。もう手作りするしかない。豆は着いていたし、いつまでも失業状態にいるわけにもいかなかった。
- ⑤ ハローワークでチョコレートを作れる人を募った。しかし、そもそもパティシエがチョコレートを豆から作っているのではない。チョコレートは溶かして作るものであり、当時、豆から作っている人は世界でも10人ぐらいしかいなかった。応募をしてくれた人達は、私がフランスかどこかでチョコレート作りを学んだシェフだと思っていた。
- ⑥ 応募者の中に偶然、コーヒー豆の焙煎もできるパティシエがいた。そこで、コーヒーの焙煎と同じようにやってみようと、10度きざみ、5分刻みで温度と時間を何10種類と試し、毎日寝ずに試行錯誤を繰り返してチョコレートを作り上げた。

【3】現在の状況と、これからの取組み

- ① 設立から3年と少しが経ち、大手の百貨店はほぼ全部と取引がある。メディアへの露出も多く、テレビは月1回くらい、雑誌は月に3、4冊に載る。新聞も、日経、読売、中日ほか、かなり数多く取り上げられている。表彰されることも多く、賞は総ナメにしている、京都の産業界では知らない人がいないくらいになっている。
- ② 農家の生産性を約2割上げ、発酵をして価格を2割上げ、4割くらい上げた。しかし、影響を与えることができた農家は40人くらいで、スラウェシ島には約40万人の農家がいる。今のやり方では何百年もかかる。
- ③ カカオは元々、農家が栽培し収穫して業者に売り、それを商社がロッテなどのお菓子メーカーに売って、チョコレートを作っていた。その際の価格は、国際市況で投資家が決めている。途上国の生産者は、自分で作ったものの価格を自分で決められない。年金や失業保険があるわけでもなく、セーフティネットがない中で価格の決定権がないことが問題だと考えた。
- ④ この事業を立ち上げたのは、半分はビジネスだが半分はソーシャルな意味があること。農家に価格決定権を持ってもらいたい。そのためには、農家がチョコレートを作ることが出来れば、と考えた。カカオ豆は原料なので相場の影響を受けるが、チョコレートを作れば、農家

が自ら価格を決められる。おいしいチョコレートを作れば高く売れるし、おいしいチョコレートができるのは良い豆を作ったときだ。

- ① カカオの相場が下がったときに、100 円が 50 円になったら餓死するかもしれないが、チョコレートを作れば原料が安いのでかえって儲けることができる。資本主義の世の中なのだから、寄付のようなフェアトレードではなく、農家の人々に教える形でやっていきたい。
- ② ノウハウと機械を提供すれば、チョコレート作りができると思ったが、電気に問題があった。インドネシアには雨季と乾季があり、水力発電なので雨季でないと安定した電力供給ができず、1年を通してしょっちゅう停電する。そこで、電気を作ろうと考えた。これまで捨てていたカカオの皮の成分分析を試みた結果、炭素が多く含まれ、油分も多く、メタンガスができることが分かった。また、皮から炭素を取っても、マグネシウムやカリウムやリンなどのミネラルは残ったままで、肥料に使える。スラウェシ島の農家では現在、化学肥料に約 5000 円使っている。化学肥料を皮の肥料に変えれば肥料代はかからないし、約 3 年でオーガニックの認定を取ることもできる。
- ③ これはインドネシアだけでなく、全世界のカカオ農家でできること。このビジネスモデルが実現すれば、世界にインパクトを与えることができる。
- ④ 昨年 12 月に、新たに会社を立ち上げた。この会社の立ち上げにあたっては、インドネシアからの内閣府事業参加青年で現在は大使館の要職に就いている人とも話し合った。事業内容は、東南アジアから日本へ進出しようとしている企業へのコンサルティングが主である。

以上

【事業で、新たな世界観を培い、アジア諸国との文化交流に関する著作を多数執筆】

属性	「東南アジア青年の船」参加者	女性・40歳代 東京都在住
経歴	90年代より、21世紀はアジアの時代であると確信し、大学時代に中国語・タイ語・ヒンディ語を学習。東南アジアを、1回で歴訪できる機会は、他にない貴重な経験であると思い、第21回（平成6年度）事業参加。	
現況	日韓の大手新聞共催による日韓交流論文募集で最優秀賞を募集、アジア系女流作家として本格デビュー。アジアをテーマにしたエッセイや概説書を執筆。大学卒業後に台北と上海の大学に短期留学。	

<事業参加による意識変化、行動、社会への働きかけ>

- 1 事業参加の影響で、卒業論文のテーマとして、東アジア～東南アジアを俯瞰する経済発展論を記そうと思うに至った。また、卒業後に就く作家の仕事に向けて、「汎アジア」という視点や世界観が形成された。
- 1 参加した他の国際交流事業と比べ、逃げ場のない空間である船上で行われる東南アジア船は、人間関係の密度が濃く、それゆえに20年後の現在にもネットワークがつながっていたり、参加をきっかけに人生が変わった人が少なくない。
- 1 当時、それまで日本の報道で触れていたアジアとは、クーデターや貧困、スラム等であったが、事業で、東南アジア各国、選りすぐりのエリートたちと交流し、彼らの目線を借りて、あらためて生の東南アジアに触れたことで、全く新しいアジア観、世界観というものが生まれた。
- 1 こうした世界観を深めるため、参加後は台北と上海の大学に短期留学。作家としてアジアをテーマにしたエッセイや概説書を国内外で20冊近く執筆してきたほか、アジア諸国との文化交流推進に係わる政府系有識者会議の委員を務める、国際交流をテーマにしたテレビ番組やラジオ番組への出演もある。

1. 事業参加について

【1】内閣府青年国際交流事業に参加したきっかけ・理由

<汎アジア的世界観へ>

- z 90年代より「21世紀はアジアの時代」と確信していたため、事業参加の以前より、在学していた東京大学において、中国語・タイ語・ヒンズー語を学習していた。
- z 事業の募集を知り、東南アジア諸国を、ひとときに数カ国、歴訪できるというのは、他にはない貴重な体験であると思い、応募した。
- z この「ひとときに数カ国」、横並びにというのが重要なポイントである。1ヶ国ずつを数年かけて個人旅行することは、一般的に可能であったとしても、全く同じ条件下、つまり同じ時期に、（単なる観光地でなく）一定レベルの訪問先を現地視察できるというのは、大変に希なことだと思う。
- z これが可能となったことで、ふたつの大きな変化が自分のなかに起こった。ひとつは、大学経済学部の卒業論文のテーマとして、東アジア～東南アジアを俯瞰する経済発展論を記そうと思うに至ったこと。更にもうひとつは、その後、就く作家の仕事に向けて、「汎アジア」という視点や世界観が形成されたことである。

【4】参加したプログラムのうち、最も印象に残っていること、影響を受けたこと

<アジアはひとつ>

- ① 前述の汎アジアを、もう一步進めた概念「アジアはひとつ(岡倉天心より)」 - - これをスローガンでなく実感でなく体感したことが、何より印象的であり、受けた影響でもある。
- ② 直接的には、ホームステイや現地視察、参加者との交流等が、ひとつの総体となって、自身に一大意識転換を促した。
- ③ そのなかでも特にひとつ取り上げるとしたら、やはりホームステイが強烈であり、このインパクトが、その後の自身の活動の原動力となったと思う。
- ④ ホームステイではまず、各国に数限りない民族文化や習慣が存在し、それらがパッチワークのように紋様を織りなしながら、アジアという、ひとつの大きな美しいテキスタイルをあみだしているということを実感した。この強烈なインパクトが、その後に私が10年あまりをかけて、韓国、台湾、満州、ミャンマー各地の風物誌を記す原動力となった。
- ⑤ さらに、言葉のろくに通じない現地ファミリーとの、悪戦苦闘のコミュニケーションと、その成功体験が、また国を超えた人・対・人の体当たりとその大切さ、理解したいという意欲が、その後に私が各種の作品やメディア、国際会議等を通じて、日韓交流や日本と台湾との交流を進めていくうえでの原動力となった。
- ⑥ メディアやツールの発展した現代では、放っておいても、海外作品や輸入品を入手できる。フェイスブックのクリックだけで、外国人と友達になることも不可能ではない。しかしやはり本来的には、人と人が直接対面、直接対決してこそ生まれる新境地というものがあるはずだ。表層的に「知る」のでなく、魂の底まで「実感する」、さらに「意識革命に至る」ためには、国際交流等を通じた、人と人との出会いを避けて通ることはできないのではないかと。

2. 事業参加後の国際ネットワーク形成や社会貢献活動について

【1】事業参加をきっかけとして、継続している国際的な交流について

<国際交流へのさまざまなアプローチ>

- ① ひとくちに国際交流といっても、さまざまなアプローチがある。私の体験した国際的な交流は、「会議系」「メディア系」「文筆系」「講演系」に分類できる。
- ② (会議系) 外務省の作った国際会議「日韓文化交流会議」の委員(任期6年)として、日韓両国の文化交流政策を協議した。当時の座長・故・平山郁夫先生を筆頭に、俳人の黛まどかさん、芥川賞作家の新井満さん、数学者の広中平祐先生、そのほか浄土真宗の最高僧正や慶応大学教授など、多才な顔ぶれの約10名(日本側)が、韓国側の委員10名らとともに、毎年、相手の国を訪問しながら、討議を重ねるといったものであった。
- ③ (メディア系) 外務省の後援番組に出演した。前述の会議が企画した日韓交流パネルディスカッション番組(NHK教育)に、パネラーとして参加し、視聴者に日韓交流を呼びかけた。また別の外務省後援番組として、日韓両国の若者数名を集め、数日間、生活をともにするさまを追う、ドキュメンタリー番組があり、こちらにも出演した。
- ④ また台湾との交流については、大使館(台北駐日経済文化代表処)と協力のうへ、ラジオや雑誌、書籍の形で、日本と台湾のかけはしとなるべく努力をした。たとえば大使館後援の日台交流のラジオ番組に何回か出演している。うちの1回は、パーソナリティを務めた。

- ① (文筆系)外務省系の国際交流基金のウェブサイト、日韓交流を企画する人々を対象にした、アドバイス・エッセイを連載した。また朝日新聞のウェブサイト(朝日コム)に、日韓交流をテーマにした連載を発表したこともある。これは、それ以前に、朝日新聞と韓国の大手紙・東亜日報共催の、日韓交流論文募集に応募し、最優秀賞をいただいたご縁によるものであった。
- ② 自身の著書としては、前述の日韓交流論文集(共著)でデビューしたのち、地元の国際交流イベントで知りあったミャンマー国費留学生を支援した体験をもとにした小説を発表、ペンネームの共著でない単独の作品デビューを果たした。続く作品は、韓国政府主催の国際交流事業への参加体験にもとづいた、参加者の人間模様を描く青春小説だった。
- ③ (講演系)経済産業省内の東アジア共同体を研究する部会に招かれ、小さな講演をおこなった。そのなかで汎アジア的な文化交流を進めるための提言をおこなった。

【2】事後活動組織において実施している活動について

- ① いくつかの交流事業に、コーディネーターとして数回参加した。そのほか、東南アジア青年の船に新規で参加する若者たちを対象に、事前研修で講義をおこなった。また、日本青年国際交流機構のイベントで講演をおこない、国際交流の醍醐味について語った経験もある。

【3】実施している社会貢献活動について

<異文化理解ウェブサイト>

- ① ボランティアで、現代アジアをテーマとした上記の名称の月刊誌的ウェブサイトを10年以上、運営している。国際交流の重要要素である「異文化理解」のため、風物誌やアジア人についての小説、アジアについての論考を、無償で発表してきた。
- ② また、アジア好きのための掲示板を併設し、情報交換の場を提供したりもした。(現在は閉鎖)

【4】参加をきっかけとして、異文化理解や自国文化の理解のために日頃取り組んでいること

<来て見てアジア、居ながらアジア>

- ① まずアジア現地について。東アジアの各地への訪問を重ね、現地の風物や文化を常にチェックしながら、時にはそれをもとに文章を編んだりもしている。
- ② さらに日本国内として。現地発のニュースを追っている。日本のメディアを通すよりも、むしろ現地メディアを重視している。ある出来事も、彼らの視点では、どのようにとらえられるのか。先進国の通信社等の色めがねを通してではなく、アジア人自身のまなざしを大切にしたいと考えている。現在では数を減らしているものの、一時期は東アジア共同体範囲(ASEAN10ヶ国+3)すべての現地ニュースを、毎週のようにインターネットでチェックしていた。

【5】語学力や国際的に通用する資格取得等、自己啓発で行っていること

<ネイティブの語学を通じて>

- ① 事業参加後、台北(台湾)と上海の大学に留学した。
- ② 現地語の文献を読むことも、良いブラッシュアップになる。取材も兼ねて、台湾や韓国の雑誌やウェブサイトを見ていた。

- ⑦ 前述の韓国語については、大学在学中に第三外国語として韓国語の授業を受講するだけでなく、韓国人家庭教師に学んでいた。さらに自身の作品が5冊、韓国で翻訳出版されていることから、その翻訳結果をチェックするなど、仕事を通じて語学力を向上させる機会を得た。
- ⑧ 日常生活のなかでは、なるべく上海人の夫に中国語で意思を伝える、自宅にひいている中国語放送の番組を通じて、中国語表現を学ぶなどの努力をおこなっている。

【6】事業で得た人脈やネットワークが仕事や社会貢献活動に役立っている例

<アジア目線>

- ⑦ 「アジア人の見た自分の国、自分の文化」を大切な文筆スタンスとしているため、アジア人との何気ない対話から得たヒントやインスピレーションを、作品に生かしてきた。

3. 参加後の自身の能力向上やキャリア形成について

【1】リーダーシップやマネジメント力向上において事業参加経験が役立っていること

<人と人との体当たり>

- ⑦ 交流とは、人と人との「心の体当たり」である。全く異なるバックグラウンドを持つ人々と、理解を深めるには、どのようにしたら良いのか。その試行錯誤の体験が、たとえば、からみきった日韓関係や、見下し感のあった日台(台湾)関係に対する改善のとりくみに生かされた。
- ⑧ たとえば日韓関係において、相手の心情を、相手の立場にたって考慮するというのは、他国にも増して重要である。ある発言に至るのは、背景にどのような国民的気質や、歴史的経緯があるのか。韓国人は日本以上に熱く直情的である、また台湾に比べて統一王朝の歴史が長くプライドが高い、などという事情が分かれば、彼らの糾弾も、一方的にカットとなることなく、いったんは受けとめたうえで、その先の議論に持っていくことができる。これは実際に、前述の日韓交流番組収録中や、日韓文化交流会議上で、発生したことである。(直接的な社内の人間関係等ではないが、マネジメントの変形として記した。)

【2】調整・交渉を進める実践的な能力向上において事業参加経験が役立っていること

<船独特の一体感>

- ⑦ 調整とは、言い方を変えれば、人と人との共存だが、その本来の姿を、東南アジア青年の船で、垣間見た思いである。
- ⑧ 参加した他の国際交流事業と「東南アジア青年の船」が明らかに異なるのは、人間関係の密度だと思う。一般の交流イベントでは、参加中の「ハレ」の時間が終わり、自宅なり宿舎に戻ると、いったん熱は冷めざるをえない。あくまで国際交流とは、一時的なスタンスであることを、否めない。
- ⑨ その点、船というのは、逃げ場のない空間である。周囲は大海のみ、たとえば東南アジアの激辛料理も、東南アジア人との軋轢も、すべては、ひとつ屋根の下の出来事として、また我が身の我が事として、とらえざるをえない。さらには心理的にも、大海に1点、灯がついた船のなかで、いやおうなしに強く濃い一体感を感じざるをえない。それが国際交流の基本スタンスに、自然となる。寝ている間にも、交流モードが自然にしみこむという感じである。
- ⑩ 船という形式は、政府としては、実に、お金がかかる事業かもしれないが、国際交流効果な

るものは、確実であると思う。私の参加した代の青年たちが、20年後の現在までも、フェイスブックで自発的に同窓会グループを作っているのは、それが船であったから、といっても過言ではない。

- ① 実際に東南アジア青年の船では、参加後に人生が変わっている人が、少なくない。たとえば親しかった参加者の1人が国際協力事業団（JICA）に務めたり、親友の女性にいたっては外交官となり、それでも満足せずに一年発起、現在では国連の職員となり、今、アフガニスタンにいたりしている。
- ② 本来であれば、普通にOLやサラリーマンとして埋もれていたかもしれない人々が、JICAや国連に行くまで、背中を後押ししたのは、やはり東南アジア青年の船ではないかと思う。おまけながら、当時のタイ人参加青年もまた、その後にタイで外交官となり、日本にまで留学を果たした。日本政府としては、海外に親日派を増やすうえでも有効であったといえる。

【3】キャリア形成や人生に関して影響を受けたこと

< 強く魅力的なアジア >

- ① 単に「世界人類みな兄弟」というレベルにとどまらない、世界観の一大転換が起こった。「強く魅力的なアジア」というスタンスを一貫させて、20冊近くの著作を出してきた原体験は、やはり東南アジア青年の船にある。当時、それまで日本の報道で触れていたアジアとは、クーデターや貧困、スラム等であった。ところが国際交流で東南アジア各国、選りすぐりのエリートたちと交流し、彼らの目線を借りて、あらためて生の東南アジアに触れたことで、全く新しいアジア観、世界観というものが生まれた。「発展するアジア、豊かなアジア」というもの。こうした新しい視点を胸に、その後、韓国や台湾、満州を歩いてまわり、おしゃれで小粋な風物を集め、エッセイや風物誌を通じて、新しいアジア観というものを、読者に伝えてきた。
- ② 東南アジア青年の船が、その後の仕事や半生を支える、重要な価値観や世界観を形づくる、原体験となった。

【4】現在の会社や所属機関等から期待されている役割

< 日本のひきこもりのなかで >

- ① 20年前に比べて、日本に元気がないと感じるのは、自分だけだろうか。東アジアのなかで、日韓や日中の関係悪化、東アジア共同体論がなりをひそめ、日系企業の東南アジアへの直接投資も現地賃金の上昇から、一部をのぞき低調である。10年前までは、週末OL旅行時代があったが、アラフォー女性達が、当時の余波で海外旅行を続けているとはいえ、35才以下の世代は、めっきり外国旅行をしなくなった。海外旅行ブームの終わりと言われて久しい昨今である。
- ② 全体的に日本が内向きであると感じられることがしばしばある。国際関係、特に東アジアのなかで、日本が孤立気味とでもいうべきか。放っておいても、海外に人々が向かっていた時代は終わってしまった。
- ③ しかし日本は突然、南太平洋に引っ越して孤島となるということはない。日本をとりまく国際関係は、厳然と存在する。日本のひきこもりの時代だからこそ、私もまたアジアを人々に発信しつづけたと考えている。内閣府の国際交流事業もまた、国際畑に強い人材の育成を、積極的におこなう必要が、以前にも増してあるのではないか。

< 想いのネットワークづくり >

- ① これは自身が日韓関係や日台関係、日中関係にとりくむ上で、痛感したことでもあるが、領土問題等で、国・対・国の関係が、一時的に悪化したように見えても、長い目で見て、それを正常化していくのは、ひとえに人と人との関係ではないだろうか。ほんの身近なグルメでも、ドラマでも音楽でも、友達でもいい。その国を愛しいと思う、個人・個人の想念が、ネットワーク状に無限にうっすら世界を覆うことで、断交や地域紛争といった最悪の事態を避けられるのかもしれない。だからこそ私は、20年の活動を通じて、アジアの魅力を人々に伝えてきた。
- ② 国際交流は、ひとつのセーフティネットづくりである。ハードパワーのような力づくでない、いわばソフトパワー的な方面からの、一種の「安全保障」であるとも言える。

4. 参加者ご自身について

【1】業種

- ① 文筆業

【2】職種

- ① 作家

【3】仕事内容

- ① アジアをテーマにしたエッセイや風物誌、概説書を執筆、海外での出版も含めて著作は20冊近くに及ぶ。

5. その他

< 「東南アジアというパワースポット」 >

- ① 私の東南アジア青年の船への参加当時は、東南アジアといえば、日系企業の直接投資先程度の認識が一般的だった。しかし現在の東南アジアは、ASEANとして、中国に並ぶ東アジアの重要地域である。
- ② 今、一時的に、東アジア共同体構想がストップしているが、個人的には、数年内に再起動すると考えている。OECDの予想によれば、中国が米国のG N Pを追い抜くのが、本年と言われていた。多少、遅れが出ている模様だが、数年内に世界一となるのはまちがいない。つまり世界規模でのパワースポットが、東アジアにシフトするということである。中国主導で、必ず、東アジア共同体は復活すると確信している。
- ③ その際に中国と同規模の経済主体として、アセアンが、必ずや日本にとって欠かせないアクターとなり、パートナーとなるものと予想される。実際、既に、現首相は、就任から1年以内のかなり早い時期に、ASEAN 歴訪をおこない、ミャンマーまで訪れた。
- ④ 東南アジア青年の船が、40年以上をかけて培ってきた内外の人脈が、必ずや生かされる時が訪れると信じている。

以上